

佐倉市文化財保存活用地域計画(案)

令和 5 年 7 月

千葉県佐倉市

目 次

第1章 計画の概要

- 第1節 計画作成の背景と目的3
- 第2節 地域計画の位置付け4

第2章 佐倉市の概要

- 第1節 自然的・地理的環境9
- 第2節 社会的環境15
- 第3節 歴史的環境19

第3章 佐倉市の文化財の特徴と現状

- 第1節 佐倉市の文化財の概要・特徴と現状42
- 第2節 文化財の把握調査の概要65
- 第3節 これまでの文化財の保存・活用の取組み76

第4章 佐倉市の歴史文化の特徴

- 第1節 佐倉市の5つの歴史文化82
- 第2節 5つの歴史文化からみる佐倉の特徴84

第5章 文化財の保存・活用に関する将来像と方向性

- 第1節 文化財の保存・活用に関する将来像85
- 第2節 将来像の実現に向けた目標と方向性86
- 第3節 文化財の保存・活用に関する課題と方針92

第6章 文化財の保存・活用に関する措置と推進体制

- 第1節 文化財の保存・活用に関する措置の考え方99
- 第2節 文化財の保存・活用に関する措置102
- 第3節 文化財の保存・活用に向けた推進体制117

第7章 関連文化財群及び文化財保存活用区域

- 第1節 関連文化財群及び文化財保存活用区域設定の考え方124
- 第2節 関連文化財群の概要と措置125
- 第3節 文化財保存活用区域の概要と措置141

- 資料編147

第1章 計画の概要

第1節 計画作成の背景と目的

佐倉市は、近世以降に城下町として栄え、佐倉城を中心に、武家屋敷群、古い町並み、祭礼文化等が残されています。また、幕末期の藩主によって蘭学が推奨され、蘭学の先進地として栄えました。明治時代には陸軍歩兵の連隊が置かれ、戦後はベッドタウンとして成長するなど、伝統と文化を築き上げながら発展してきました。

平成28年(2016)4月には佐倉市は、同じ北総に位置する成田市、香取市、銚子市とともに、日本遺産「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み ―佐倉・成田・佐原・銚子・百万都市江戸を支えた江戸近郊の四つの代表的町並み群―」(以下、北総四都市江戸紀行)に認定され、城下町としてストーリーを構成する四都市の一つに数えられています。

一方で、佐倉城や城下町に関わる文化財だけでなく、縄文時代の井野長割遺跡(国指定史跡)を始めとする原始・古代の史跡や、戦国時代に千葉氏の新たな本拠地として築城された本佐倉城(国指定史跡)等の中世の城館跡など、佐倉市には様々な文化財が残っています。

このように、佐倉市は豊富な文化財を持ちながらも、今まで、主に佐倉城の城下町エリアにスポットライトが当てられ、未指定も含めたその他の文化財が取り上げられる機会が少ないことが課題の一つとされてきました。また、佐倉の歴史や文化を総合的に展示する施設がないことによる保存・活用の場と機会の不足や、高齢化や少子化にともなう、これまで受け継がれてきた文化財や伝統行事等の存続の危機等の課題があります。

令和2年度(2020)に策定した第5次佐倉市総合計画では、「笑顔輝き 佐倉咲く みんなで創ろう『健康・安心・未来都市』」を将来都市像とし、「地域の資源を活かした活力と賑わいのあるまち」の施策として、「歴史・文化資産を保全・活用」を掲げ、城下町エリアだけでなく、「原始・古代からの多数ある文化財を、市民とともに、これからも守り、生かし、伝えていく」としています。

この第5次佐倉市総合計画を踏まえ、市内に多数ある様々な時代の文化財の保存と活用を通じて、市民や佐倉に関わる人を、地域コミュニティを、そしてまち全体を元気にし、「笑顔輝き」、「活力と賑わいのある」佐倉市を創り上げていくことを目指して、佐倉市文化財保存活用地域計画を作成するものです。

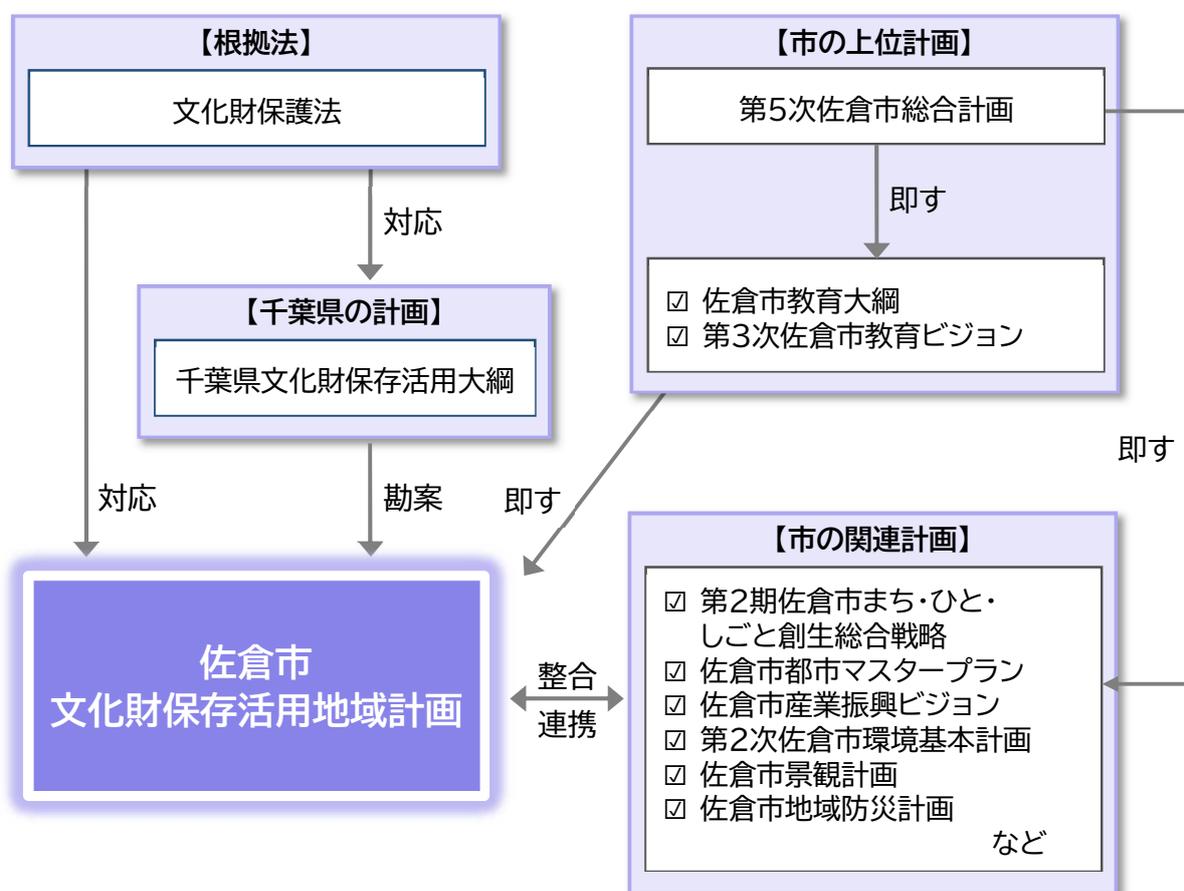
第2節 地域計画の位置付け

(1) 地域計画の位置付け

本計画は、文化財保護法第183条の3に基づく法定計画として作成します。作成にあたっては、文化財保護法に従うとともに、県の計画である千葉県文化財保存活用大綱や、上位計画である市の総合計画、教育大綱、教育ビジョンとの整合を図ります。

また、市の各種関連計画との連携を図りつつ、文化財の保存・活用に関する基本的な方針を示すマスタープランとして、かつ、具体的な措置を定めるアクションプランとして作成します。

[本計画の位置付け]



(2) 県の計画

【千葉県文化財保存活用大綱】

法第183条の2の規定に基づき、千葉県における「文化財の保存及び活用の総合的な政策の大綱」として定められています。市町村は、域内の文化財の保存及び活用に関する総合的な計画として地域計画を作成する際には、大綱を勘案すべきものとされています。

千葉県が目指す文化財の保存・活用の将来像は、「県民一人一人が文化財の魅力を知り、守り、次世代につなげ、活用することで、豊かな県民文化を育む。」であり、この将来像の下に、県・市町村が保存・活用のために講ずる措置、市町村及び文化財所有者等への支援、防犯・防災及び災害発生時の対応、県における文化財の保存・活用の推進体制などが示されています。

(3) 市の上位計画

【第5次佐倉市総合計画（令和2年度～令和13年度）】

令和2年3月に策定された第5次佐倉市総合計画は、将来都市像を「笑顔輝き 佐倉咲く みんなで創ろう『健康・安心・未来都市』」と定め、まちづくりの基本方針として「地域の資源を活かした活力と賑わいのあるまち」「豊かな心を育み 笑顔あふれるまち」等を掲げています。

「地域の資源を活かした活力と賑わいのあるまち」では、歴史、自然などの地域資源の積極的な活用により、国内外から多くの人々が訪れる、歴史、自然、文化が息づく、活力と賑わいのあるまちを目指しています。

また、「豊かな心を育み 笑顔あふれるまち」では、郷土佐倉への理解や愛着の醸成を図ることにより、地域を支える人材を育むまちを目指しています。

【佐倉市教育大綱（令和2年度～令和5年度）】

佐倉市教育大綱は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の趣旨に基づき、佐倉市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の方向性を定めるものです。

その前文では、変わりゆく社会情勢に対応した新たな価値を創造していく上で、進取の精神を育ててきた佐倉の歴史から学ぶことは、極めて大きいものであること、そして、佐倉市は、多くの人材を育てる「まち」を目指し、豊かな心の充実を教育の根幹と捉え、佐倉の歴史、自然、文化、ゆかりの人物について学ぶ「佐倉学」を推進し、佐倉で学んだ人々が、佐倉に誇りと愛着を持って一生涯活躍できるよう、教育の更なる充実に取り組んでいくことをうたっています。

また、基本方針の一つに「歴史・文化資産の保全、活用を推進し、芸術・文化を振興します」を掲げ、「好学進取」の精神に富んだ佐倉市の、文化の発展を支える確かな気風や、日本遺産に認定された歴史的な町並みなど数多くの歴史文化資産の特色を活かしながら、数多くの歴史文化資産を未来へ継承していくために、地域文化の振興に向けた取組みを行うこととしています。

【第3次佐倉教育ビジョン（令和2年度～令和13年度）】

第3次佐倉教育ビジョンは、教育基本法第17条第2項に規定されている、佐倉市の教育の振興のための施策に関する基本的な計画です。

基本理念を「私が輝き、地域が輝き、未来が輝く、“佐倉のひとづくり”」とし、めざすべき佐倉市民像を「(1) 思いやりのある豊かな心を持ち、自然や文化を大切に人」「(2) よく学び、自ら考え、進んで行動する人」「(3) 佐倉への愛着と国際的な視野を持って社会に関わる人」としています。

基本理念やめざすべき佐倉市民像の実現に向けた基本方針の一つである「佐倉の「輝く」力の向上をめざす」では、歴史・文化資産を保護保存するとともに、関係機関と連携し、有効活用を図ることにより、貴重な資産を次世代に継承し、市民の関心や興味を深めること、及び、これまで歴史・文化資産として十分認知されるに至っていないものも掘り起こし、新たな佐倉の魅力の創出に努めることを掲げています。

（4）市の関連計画

【第2期佐倉市まち・ひと・しごと創生総合戦略（令和2年度～令和6年度）】

第2期佐倉市まち・ひと・しごと創生総合戦略は、第5次佐倉市総合計画と整合を図りつつ、「佐倉市人口ビジョン（令和2年3月改訂）」に掲げた佐倉市の目標人口を維持するとともに、活力ある地域社会を構築するための取組みを示すものです。

この中で、基本目標の一つに「佐倉の魅力を発信し、「ひと」の流れを定住につなげます」を掲げ、歴史・自然・文化資源を活用しての来訪者の増加をめざし、市民の財産でもある貴重な文化財を適切に管理するとともに、観光資源として有効活用することを定めています。

また、基本目標「安心して笑顔で暮らし続けられる「まち」をつくります」において、歴史・自然・文化から育まれた佐倉市の個性を活かした景観の形成、及び保全を推進することを定めています。

【佐倉市都市マスタープラン（令和3年度～令和12年度）】

佐倉市都市マスタープランは、市町村の「都市計画に関する基本的な方針」であり、都市の将来像を明示し、それを住民や事業者、行政など様々な主体が共有することで、計画的なまちづくりを進めるための道しるべとなるものです。

将来像を「都市と農村が共存するまち 佐倉」と定め、基本目標として「佐倉らしさを守り育てるまちづくり（歴史・自然・文化の保全と活用）」や「佐倉の資産を活かしたまちづくり（産業・観光の振興）」等を掲げています。

佐倉市には、太古から人々の生活が営まれてきた歴史の蓄積、印旛沼や谷津に代表される豊かな自然、城下町を中心に人々の生活の中で構築されてきた文化などの「佐倉らしさ」が数多くあり、これらを守り育てていくことで、暮らしの場、訪れる場としての魅力を高めていくとしています。また、これら歴史・自然・文化を市民と守り、育てるとともに、市民の郷土への愛着を醸成する場や観光資源として有効に活用し、広く市の内外にPRするとしています。

【佐倉市観光グランドデザイン（佐倉市産業振興ビジョン 別冊）（令和２年度～令和１３年度）】

佐倉市観光グランドデザインは、観光振興に関する長期的なビジョンや総合的な戦略を明確にすることにより、通年型の観光地づくりを推進し、地域経済の活性化、地域文化の維持・発展、新規事業者の流入による雇用増、ひいてはシビックプライドの醸成をめざして策定されたものです。基本理念は、近隣市町、都心、成田空港、それぞれの「となり」という立地特性（３つのとなり）を踏まえ、「歴史の趣、自然の恵み『となりの観光地・佐倉』～気軽に、繰り返し、楽しめるまち～」と定めています。

施策として、城下町地区と印旛沼周辺を核とした「観光Wコア構想」を掲げ、国の登録有形文化財等の古民家の有効活用、城下町地区の回遊性の向上、城下町地区の歴史的資源を活用したサムライツーリズムの促進、日本遺産「北総四都市江戸紀行」を活用したPRや教育旅行の促進等に取り組むと定めています。

【第２次佐倉市環境基本計画（令和２年度～令和１３年度）】

第２次佐倉市環境基本計画は、環境の保全および創造に関する施策を示すとともに、市民、事業者、市のそれぞれが担うべき取組みを明示するものです。計画では、目標とする環境像を「印旛沼をめぐる私たちの暮らしを理解し、水と緑とのつきあい方をみんなで考えるまち」として、沼をはじめとする佐倉の恵まれた自然と、潤いと安らぎのある生活を享受することができる環境を、時代を越えて、将来に継承していくとしています。

基本目標の一つ「豊かな自然を守り育てるまち～自然共生社会の実現～」では、佐倉市の豊かな自然を、歴史・文化と並ぶ魅力の一つに数え、谷津をはじめとする豊かな自然や里山景観等の緑や、印旛沼等の水辺の保全を行っていくと定めています。

【佐倉市景観計画（平成２９年１２月策定）】

佐倉市景観計画は、景観法に基づき、佐倉市の豊かな歴史・文化、印旛沼に代表される恵まれた自然環境から育まれた景観を、本市の個性であり後世に伝えるべき共有財産と捉え、住んでいる人も訪れる人も、心地よさや地域の魅力を実感することができる景観の形成、活力やにぎわいのある景観の創出を目指すものです。

景観形成の基本理念に「歴史・自然・文化をつなぐ みんなで育む 佐倉らしい景観」を掲げ、基本目標の一つである「時代の積み重ねを感じさせる歴史的な資源を活かす」では、城跡や遺跡、歴史的建造物などを活かし、まちの歴史的な風土の保全・継承を図ること、「歴史のまち佐倉」を代表する佐倉城跡や旧城下町周辺において、重点的な景観形成に取り組むと定めています。

【佐倉市地域防災計画（令和４年修正）】

佐倉市防災計画は、災害対策基本法に基づいて、佐倉市の市域に係る防災に関し、佐倉市防災会議が定める計画です。災害予防、災害応急対策及び災害復旧を総合的かつ計画的に推進することにより、自助・共助・公助それぞれの主体が全機能を発揮し、かつ相互に連携して、住民の生命、身体及び財産を災害から守ることを目的としています。

地震災害対策編において、文化財の保護対策として、（１）文化財防災意識の普及と啓発、（２）予防体制の確立、（３）消防用設備の整備、保存施設等の充実を定めています。

(5) 計画期間

本計画の上位計画である第5次佐倉市総合計画の目標年次が令和13年度(2031)であることに合わせ、本計画の計画期間は、令和6年度(2024)から令和13年度(2031)までの8年間とします。

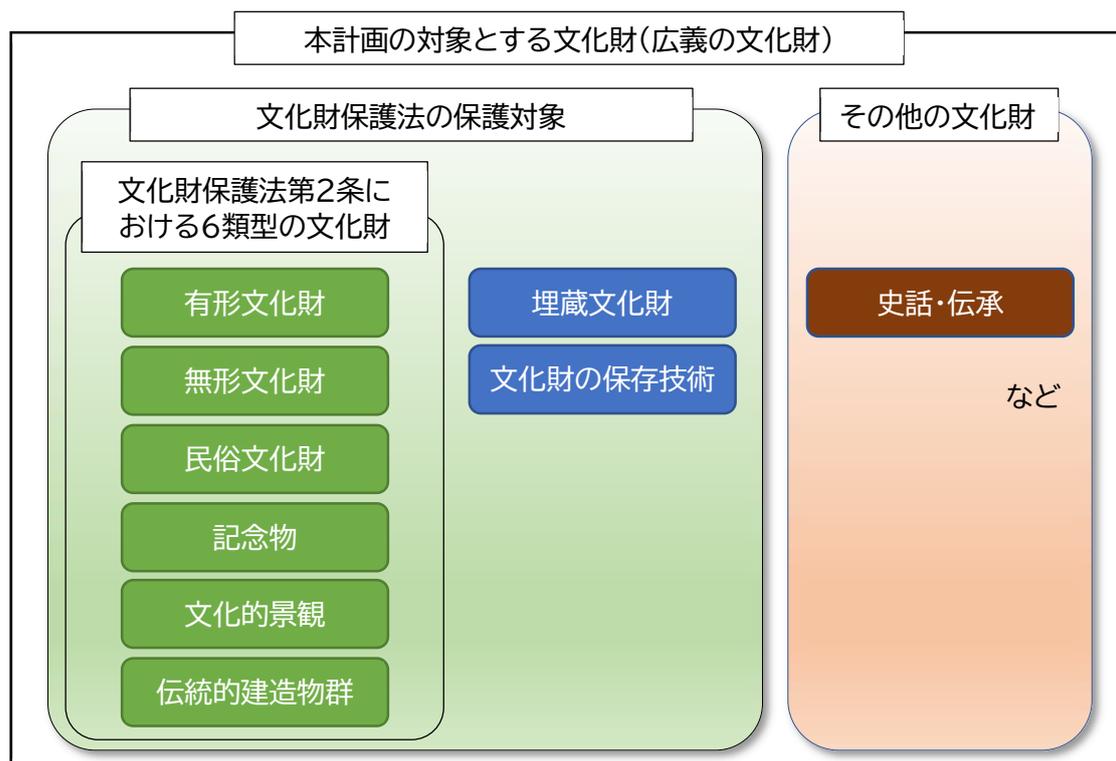
また、計画期間中は、計画の進捗状況や社会情勢の変化等に対応し、必要に応じた見直しを行い、「計画期間の変更」、「市の区域内に存する文化財の保存に影響を与えるおそれのある変更」、「地域計画の実施に支障が生じる恐れのある変更」に該当する場合には変更の認定を受けます。なお、上記に該当しない軽微な変更を行った場合には、当該変更の内容について文化庁及び千葉県教育委員会へ報告を行うこととします。

(6) 計画の対象

文化財保護法第2条における「文化財」とは、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、文化的景観、伝統的建造物群の6類型からなり、我が国にとって歴史上または芸術上価値の高いものなどを指し、指定、選定、登録、選択等の制度を設けて保護を図っています。また、県や市の条例に基づく指定・登録の制度も設けられています。さらに、これら6類型のみならず、文化財保護法には、文化財の保存技術や埋蔵文化財についても保護の対象と規定しています。

本計画では、指定・未指定に関わらず、上記の文化財保護法で定義されている文化財(狭義の文化財)や、文化財の保存技術、埋蔵文化財に加え、佐倉の歴史と文化に関わる大切なもの、そして今後の佐倉にとって重要であるものなどにも着目し、史話・伝承をはじめとする市民が佐倉の歴史と文化を語るうえで欠かせないものを「その他の文化財」として包括した広義の文化財を対象とし、これら全てを含めて「文化財」と呼びます。

[本計画の対象となる文化財の定義]



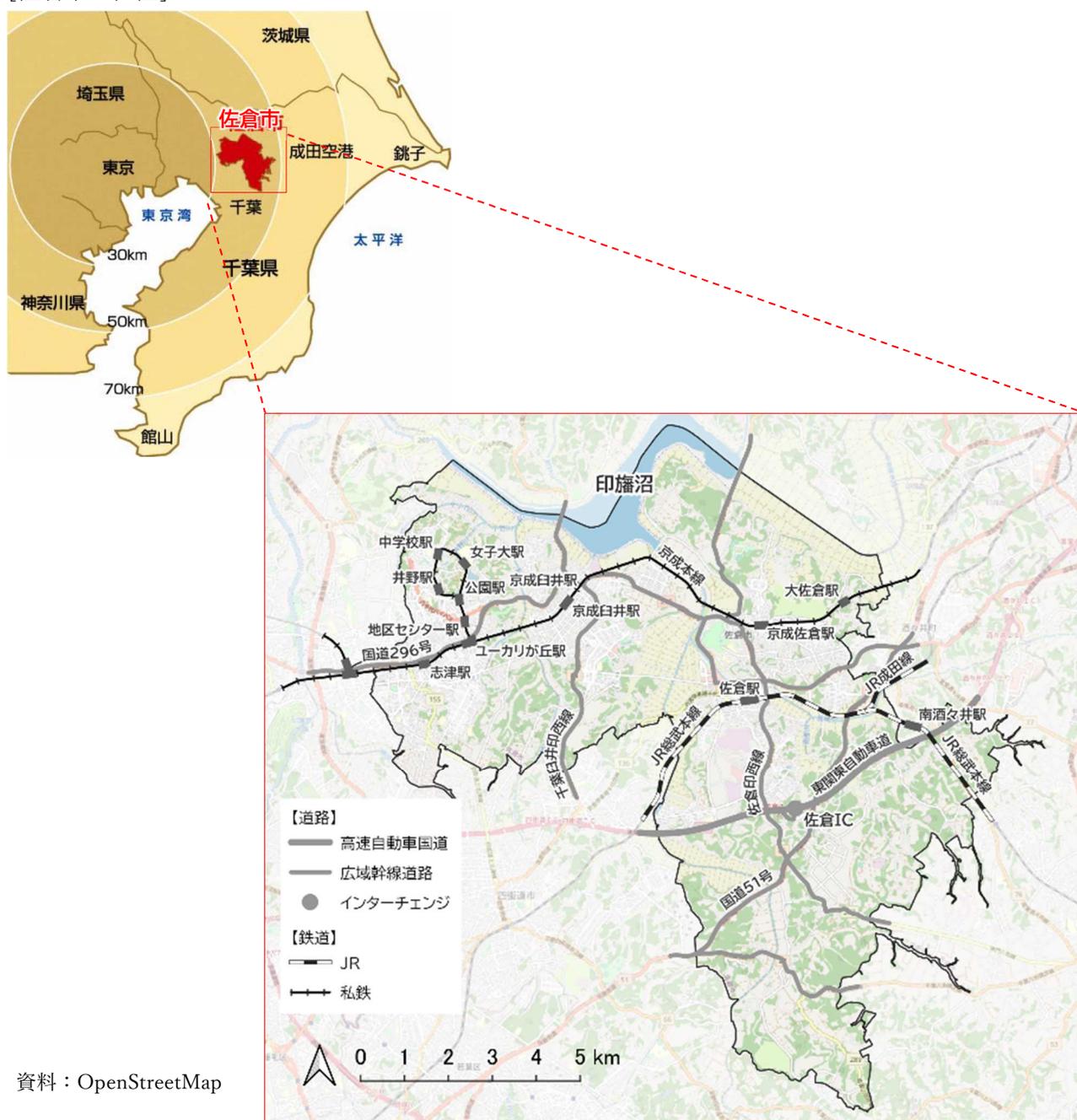
第2章 佐倉市の概要

第1節 自然的・地理的環境

(1) 市の位置と面積

佐倉市は、千葉県北部一帯に広がる下総台地の中央部に位置し、都心から約 40 k m の距離にあります。また、成田国際空港から約 15 k m、県庁所在地である千葉市から約 20 k m の距離にあり、東西約 15 k m、南北約 16 k m、面積約 104 k m² の首都圏近郊都市です。

[佐倉市の位置]



資料：OpenStreetMap

(2) 地区区分

佐倉市は、7つの町・村が合併・編入して市になったことから、現在も旧町村の7地区がそれぞれ特色ある地区として、その名残をとどめています。行政施策の対象区域としても用いられます。

[地区区分]



【佐倉地区】

佐倉地区は、京成電鉄とJR総武本線が接近し、市役所、印旛合同庁舎、検察庁、裁判所などが集まり、佐倉市の行政の中心となっています。

また、この地区は佐倉城を中心とした旧城下町で、城跡の一角には国立歴史民俗博物館が建ち、本丸、二の丸などは佐倉城址公園として整備されています。そのほか、武家屋敷、佐倉順天堂記念館、旧堀田邸など、歴史と文化を感じさせる建造物等が数多く残されています。

平成28年(2016)4月には、成田市、香取市、銚子市とともに「北総四都市江戸紀行」の城下町佐倉として「日本遺産」に認定されました。

【白井地区】

白井地区は、北に印旛沼、東に鹿島川、西に手繰川というように、三方を沼と河川に囲まれています。中世には桓武平氏一族の白井氏の居城が置かれ、江戸時代は成田詣での宿場町として賑わいました。

現在は、京成白井駅を中心にショッピングセンターや商店などが集積した地区が形成され、志津地区に次いで都市化の進んでいる地域です。白井駅の南側にある佐倉市民音楽ホールは、毎年内外の一流演奏家のコンサートが数多く開催されるほか、各種の発表会など市民の利用も多く、佐倉市の文化活動の拠点となっています。

印旛沼のほとりのふるさと広場では、チューリップやひまわりなどが楽しめるフラワーフェスタが開かれます。

【千代田地区】

千代田地区は、佐倉市の西南部に位置し、佐倉市誕生後に四街道市（当時四街道町）から編入した地域から成っています。もとは田畑や山林が広がる農村地帯でしたが、その後染井野に大規模な住宅地が造成され、農村地域と新興住宅地が共存する地域となっています。

【志津地区】

志津地区は、佐倉市の西部に位置し、昭和 29 年（1954）の町村合併による旧志津村の行政区域が、現在の地区域となっています。最も東京寄りの地区で、駅前（志津駅・ユーカリが丘駅）を中心首都圏のベッドタウンとして開発が進み、佐倉市の人口の 4 割強が暮らしています。

その一方で、市街化区域を一步出ると田園風景が広がり、自然豊かな環境の中、素朴な民俗行事が伝えられています。

志津駅のそばに平成 27 年（2015）11 月末にオープンした複合施設「志津市民プラザ」は、多くの地域住民に利用される生涯学習の拠点となっています。

【根郷地区】

根郷地区は、佐倉市の南部に位置し、鹿島川右岸とその支流である高崎川及び高崎川上流の南部川左岸に挟まれた丘陵地です。台地上あるいは台地を取り巻いて作られた集落により構成されており、旧石器時代、縄文、弥生期の土器出土、住居跡、古墳及び中世の城館跡などが点在し、古来より住みよい所であったと思われます。

中世は、上総一族の印東氏の勢力下にあった印東荘（古代末から中世にかけて佐倉・酒々井・富里に有った荘園）に属し、千葉氏が支配するようになってから集落ができてははじめ、現在のような村落が構成されたのは近世に入ってからとなります。

旧来、鹿島川と高崎川流域を中心に、稲作を主体とした農業が営まれる農村地帯でしたが、J R 佐倉駅と東関東自動車道の佐倉インターチェンジがあることから、鉄道と高速道路における佐倉市の玄関口となり、更に成田空港に近接する地の利を活かし、第 1・第 2・第 3 工業団地・熊野堂工業団地が整備され、本市の製造業の中心地となっています。

【和田地区】

和田地区は佐倉市の最東端に位置し、農業が盛んな地域です。大正頃まで農家の主な産物は米・養蚕でしたが、昭和初期になると養蚕が衰え、里芋・落花生・甘藷の生産が盛んになりました。戦後、豚の飼育が盛んになり、昭和 27 年（1952）頃には全国的に有名な養豚地区となります。その後、養豚・酪農・大和芋と専門化され、大型機械の導入も盛んに行われてきました。このように高度に専門化された農業が行われている地域ではありますが、従事者は年々減少し、後継者育成が大きな課題となっています。

一方で、地区内を国道 51 号線と東関東自動車道が通り、佐倉インターチェンジに隣接しているため、企業の物流基地が進出するなど、近年は土地利用に変化が見られます。

和田地区の中核施設「和田ふるさと館」内には、和田公民館分館として、平成 13 年（2001）には歴史民俗資料室が設置されました。

【弥富地区】

弥富地区は、佐倉市の南部に位置し、千葉市・八街市・四街道市と接した、のどかな田園地帯です。佐倉市のほぼ中央を流れる鹿島川の上流とその2本の支流に沿って田畑が作られ、その周囲に集落群が形成されています。

地区の中心産業である農業は、時代の変化とともに、耕作面積、農業戸数・農業者人口とも減少を続けています。

このような中で、企業の研究所の設置や美術館の開館、さらに弥富地区と千葉市にまたがる地域にちばリサーチパークという研究施設等の大規模開発が行われ、新たな土地利用が徐々に広まりつつあります。

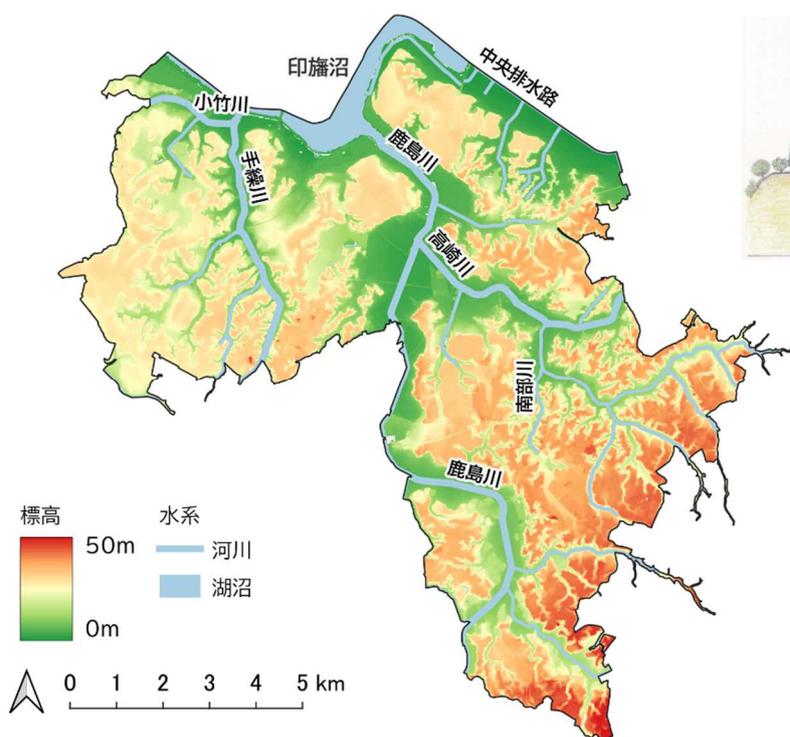
(3) 地形

① 地形

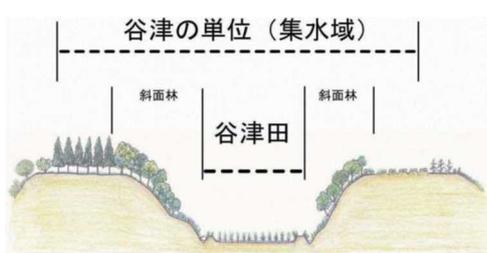
本市の地形は、標高30～35mの下総台地と印旛沼低地で構成されており、台地は北から南へ向かうほど徐々に高くなっています。また、鹿島川、手繰川、小竹川など、市内の水系の多くが印旛沼に注いでいます。下総台地では、鹿島川と手繰川からの支流が樹枝状に広がり、台地を侵食して大小の谷を刻み、谷津（やつ）と呼ばれる地形を形成することで、複雑かつ特徴的な地形を生み出しています。

このように、台地と谷津からなる起伏のある地形のため、どこへ出るにも必ずと言ってよいほど坂を通らなければならないことから、佐倉は「坂のまち」と言われ、ひよどり坂、薬師坂など、古くから名前が付けられた坂が今もたくさん残されています。

[佐倉市の地形と水系]



[谷津と谷津田]



資料：国土地理院「基盤地図情報数値標高モデル (5mメッシュ標高)」

② 印旛沼のすがたと変遷

市境の北面に位置する印旛沼とその周辺は、かつては「香取海」という内海の一部でしたが、鹿島川や手繰川等の上流からの土砂の流入と海退現象によって徐々に陸地化が進行し、また、江戸時代初期からの利根川東遷事業が行われたことで、堆積作用による湖沼化が急速に進み、現在の印旛沼の原型が形づくられたとされています。

[香取海（約 1 万年前）と現在の佐倉市域]



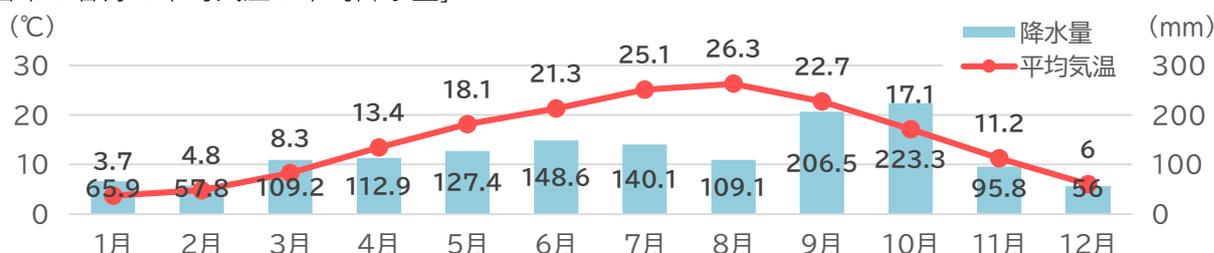
利根川東遷事業の完成後、印旛沼及び周辺では頻繁に利根川や印旛沼による洪水が引き起こされましたが、印旛沼を取り囲む情景は、江戸時代には景勝地「白井八景」としても知られていました。

昭和 43 年（1968）の「印旛沼開発事業」の竣工により、印旛沼の姿は現状に確定し、印旛沼は隣接する手賀沼とともに「県立印旛手賀自然公園」に指定された風光明媚な湖沼として、上水道、工業用水及び農業用水の貴重な水源としてのみならず、水産、レジャー、親水、観光など多方面にわたって利用されています。

(4) 気候

佐倉市の気候は、東日本特有の温暖多雨の型に属しますが、その中ではやや内陸的・小雨の傾向にあります。平成3年(1991)から令和2年(2020)の平年値¹では、年間平均気温が14.8度、年間降水量が1455.9mm、年間平均風速が2.4m/秒となっています。

[佐倉市の各月の平均気温と平均降水量]



資料：気象庁データの平年値 (H3~R2) をもとに作成

(5) 自然・生態系

佐倉市に広がる谷津が織りなす複雑かつ特徴的な地形は、多様な野生動植物の生息・生育場所となっています。市内の植生は、斜面から台地上にかけてはコナラ、イヌシデ、クヌギなどの落葉広葉樹林、台地上にはスギ・ヒノキ植林やシイ・カシの照葉樹林、ムクノキ・ケヤキなどの高木があり、ヤマザクラやコブシ、カエデ類、林床の草本類とともに四季おりおりの里山に彩りを添えています。

多様な植物群落は動物の餌場にもなっており、オオタカやサシバなどの猛禽類やタヌキやイタチなどのほ乳類の生息が確認されています。さらに、ゲンジボタル、ホトケドジョウ、キンラン、カタクリなどの貴重な動植物の生息・生育も確認されています。

これらのほか、植物学者の牧野富太郎が市内で発見した、キク科オグルマ属の多年草「サクラオグルマ」には、「佐倉」の名が付けられています。

一方、アライグマやハクビシンなどの外来生物による農作物などの被害が増加しています。

¹ 気象庁において現在用いられている30年間の平均値のこと。10年ごとに更新される。

第2節 社会的環境

(1) 人口動態

① 総人口

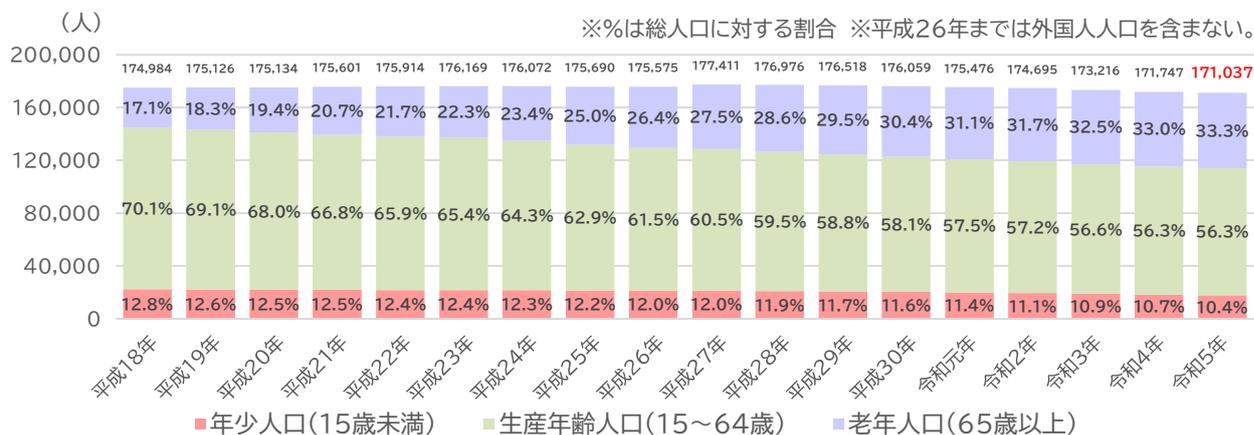
佐倉市の外国人人口を含む総人口は、令和5年(2023)3月末時点で171,037人です。平成16年(2004)以降は概ね横ばいで、平成23年(2011)の178,199人をピークに減少傾向にあります。

基準ケースによる将来人口は、2040年には約139,000人、2060年には約975,000人の見込みです。

② 年齢階層別人口

年齢階層別人口をみると、令和5年(2023)3月末時点で年少人口比率は10.4%、老年人口比率は33.3%であり、少子高齢化が進行しています。

[佐倉市の年齢階層別人口]



資料：佐倉市人口情報(H18~R5)をもとに各年3月末時点の値で作成。

③ 地区別人口

地区別人口をみると、直近10年では、住宅整備等が進んだ志津地区と根郷地区で一時期人口の増加が見られましたが、全ての地区で10年前よりも減少しています。特に、和田地区、弥富地区の人口減少率が10%超と顕著になっています。

(2) 産業

佐倉市の産業では、事業者数や従業者数の85%近くをサービス業などの第3次産業が占めています。第3次産業の中でも卸売・小売業が事業所数全体の約24%、従業者数も約21%となっており、主要な産業となっています。

本市の農業は、従事者数の割合は少ないものの、首都圏への農産物供給を担う都市近郊農業が展開され、特に米や野菜(やまといも、トマト、落花生等)の生産が盛んです。ただし、後継者不足や都市化の進展等により、農家数、農業従事者数は減少傾向にあります。

(3) 土地利用

佐倉市の土地利用は、南部の台地等を中心とした山林、印旛沼の周辺や鹿島川、手繰川流域等の低地に集中している農地、西部及び東部地域に分散して形成された住宅地を中心とする市街地によって構成されています。

現在の市街地は、古くからの既成市街地に加えて、昭和 40 年代以降の宅地開発によって京成本線及び J R 総武本線の各駅を中心に形成されたものであり、大きく分けて、志津(志津駅、ユーカリが丘駅)、白井・千代田(京成白井駅)、佐倉・根郷(京成佐倉駅、J R 佐倉駅)の 3 地区があります。商業地は、志津駅、ユーカリが丘駅、京成白井駅、京成佐倉駅と J R 佐倉駅にそれぞれ分散して形成されています。工業地としては、南東部の佐倉インターチェンジ付近に佐倉第一、第二、第三、熊野堂工業団地、南部にちばリサーチパークがあります。

(4) 交通機関

① 道路

幹線道路では、高速自動車国道として東関東自動車道が、広域幹線道路として国道 51 号と国道 296 号が通っています。南部地域を通る東関東自動車道は、佐倉インターチェンジにより国道 51 号と連結しており、国道 51 号とともに、千葉と成田方面を結んでいます。

市の北部を志津、ユーカリが丘、白井、佐倉と結んで、酒々井方面と連絡している国道 296 号は、かつては江戸と佐倉を結ぶ「佐倉道」と称され、東海道などの五街道に次ぐ幕府公認の主要脇街道でした。江戸時代中期以降に成田山への参詣者が増えるにつれ、「成田道」や「成田街道」と呼ばれるようになりましたが、街道沿いには白井宿が賑わい、現在も道標、常夜灯、石仏、石碑、道路元標など、近世から明治期の石造物が多く残されています。

その他の主要道路としては、主要地方道佐倉印西線及び千葉白井印西線が市内を南北に縦断し、市内各市街地間の連絡及び広域幹線道路との連絡機能を果たしています。

② 鉄道

鉄道は、北部に京成本線、中央部に J R 総武本線が走っており、都心や成田空港からの交通利便性に恵まれています。

京成本線には志津駅、ユーカリが丘駅、京成白井駅、京成佐倉駅、大佐倉駅があり、J R 総武本線には J R 佐倉駅があります。J R 線は市の東端で北行して成田方面へ向かう成田線と、南行して銚子方面へ向かう総武本線に分かれています。

また、新交通システム「山万ユーカリが丘線」が、ユーカリが丘駅を起終点として、ユーカリが丘や宮ノ台地区を周回しています。

③ バス路線

佐倉市内に停留所を持つ路線バス事業者は6社で、18路線あり、市内の主な鉄道駅や勝田台駅、印旛日本医大駅、酒々井駅など近隣市町を結ぶ路線が運行されています。また、交通空白地対策として、佐倉市コミュニティバスを5ルートで運行しています。このほか、通勤時間帯には、高速バスで佐倉市内と東京駅や国際展示場駅（東京都江東区）等を結ぶ便が運行されています。

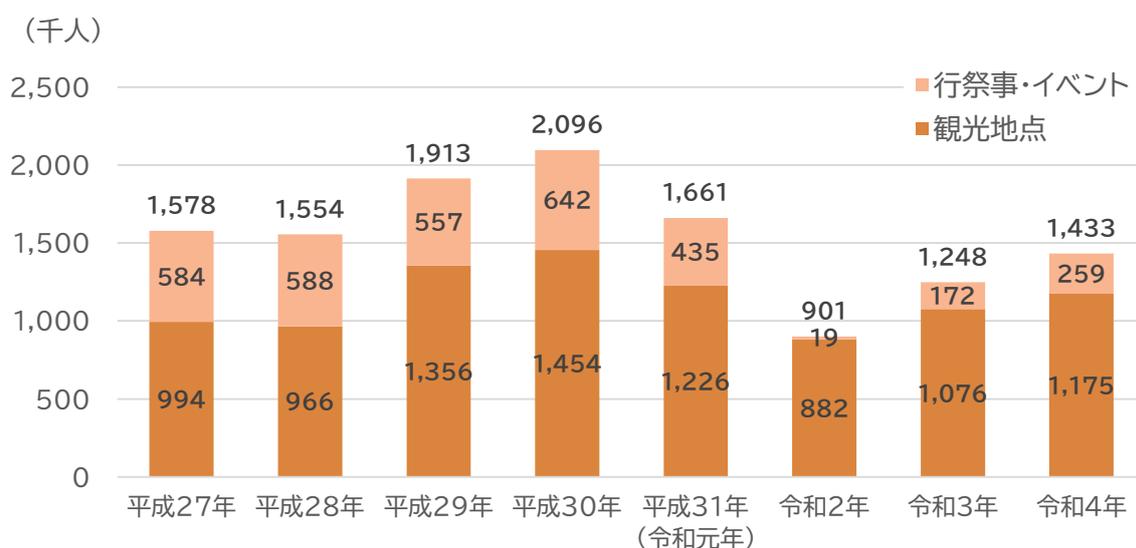
（5）観光

佐倉市には歴史・自然・文化といった旧来から根付いている観光資源があり、また、都心や成田空港からの交通利便性にも恵まれ、平成30年（2018）には約210万人の観光客が本市を訪れています。特に近接する成田空港は、世界118都市、国内19都市と結ばれており（平成30年（2018）7月現在）、平成31年（2019）に入国した訪日外国人観光客数は897万人を超えています。また、国内LCCの就航に伴い、国内線旅客数も平成31年度（2019）には746万人を超え、成田空港は、名実ともに日本の空の玄関口となっています。

しかしながら、恵まれた立地条件が十分に活かされておらず、観光客の増加に繋がっていない状況です。今後は少子高齢化や人口減少により社会環境が変化していく中で、イベント等による一過性の観光客増加の取組みだけでなく、長期的な戦略に基づき効果的かつ効率的に、観光客を増加させる取組みが求められています。

また、近年は令和2年（2020）からの新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、団体客を中心とした観光客数やイベント集客に大幅な減少が見られましたが、徐々に回復してきています。

[佐倉市の観光入込客数の推移]



資料：千葉県観光入込調査報告書（H27～R3）をもとに作成

(6) 博物館・資料館及びその他展示施設等

佐倉市の博物館、資料館及びその他の展示施設等は、市立の包括的な博物館・資料館はないものの、市立美術館1施設、国立の博物館1施設、民間の美術館2施設が立地し、そのほかにも様々な展示施設が点在しています。

この中で、武家屋敷、旧堀田邸及び佐倉順天堂記念館は、国・県・市の文化財に指定されている建物等を公開するとともに、様々な普及啓発事業の場として、また、テレビ番組や映画撮影のロケーションとしても活用が図られています。

[佐倉市内の博物館・資料館及びその他展示施設等]

名称	概要	設置
国立歴史民俗博物館	日本の歴史・文化を総合的に究明する目的のもとに研究・展示を行う博物館。	国
佐倉市立美術館	房総ゆかりの作家の作品を収集・展示する佐倉市立の美術館。	市
DIC 川村記念美術館	20世紀美術を中心とした多彩なコレクション展示や企画展を開催。	私立
塚本美術館	佐倉出身の実業家、塚本素山氏のコレクションが収められた刀剣類専門の美術館。	私立
武家屋敷	江戸時代の武家屋敷である旧河原家住宅、旧但馬家住宅、旧武居家住宅の3棟を公開。	市
旧堀田邸	最後の佐倉藩主堀田正倫の邸宅。明治期の旧大名家邸宅として現存する数少ない貴重な建築。	市
佐倉順天堂記念館	江戸末期に蘭方医佐藤泰然が開いた蘭医学の塾兼診療所。当時の医療器具や書籍を展示。	市
佐倉新町おはやし館	佐倉の秋祭りで引き回される山車人形や佐倉囃子に関する資料、祭りの写真等を展示。	市
和田ふるさと館 歴史民俗資料室	和田地区で集められた古い農具、民具等を中心に、古くからの農村の生活の様子、習俗などを展示する資料室。	市
弥富民俗資料展示室	弥富民俗資料収集委員会が収集した、弥富地区の衣・食・住生活に関する資料や、各種農具を展示。	市
白井公民館まちづくり 資料室	白井・千代田地区に関する歴史や遺跡などについて、理解と関心を深める資料を展示。	市
夢咲くら館・ 佐倉を学ぶフロア	夢咲くら館（佐倉図書館等新町活性化複合施設）の中に、「佐倉を学ぶフロア」として古文書や歴史資料を展示。	市
ぎゅぎゅっと佐倉歴史 館	ミレニアムセンター佐倉の中に暫定開設された、佐倉の歴史について学ぶことができる展示コーナー。	市
佐倉高校地域交流施設	藩校の流れを汲む佐倉高校の施設。展示室で県指定文化財の鹿山文庫関係資料等を展示。	県
佐倉城址公園センター	佐倉城に関する模型や古写真、出土遺物などを展示。	市

第3節 歴史的環境

(1) 旧石器・縄文時代の佐倉

① 概略

旧石器時代とは、地質時代でいう第四紀更新世（約260万年前～1万2千年前）にあたり、佐倉市では約3万5千年前から人々の活動の痕跡が認められます。この時代の人々は、氷河期と間氷期が繰り返されるという厳しい気候環境のなかで動物を追い求めながら場所を移動し続ける遊動生活を送ってきました。その移動範囲は、時に数百キロに及ぶ長大なスケールであったことが、これまでの研究で明らかにされています。その足跡は石器や焚火の跡として遺跡に残されており、石器や石材の中には関東地方のみならず、遠く東北地方や北陸地方、中部地方のものも含まれています。その一方で、住まいの痕跡は、市内では未だ確認されていません。その原因の一つは、遊動生活という性質上、続く縄文時代の一般的な竪穴住居とは異なり、簡素な作りの住まいであったことが挙げられます。

このような生活様式であったため、当時の生活道具である石器にも広域な文化様相を反映しています。東西日本の境界にあって太平洋側に位置する千葉県は、東西日本の石器文化が交錯する状況が見て取れ、佐倉市域でもこうした地理的環境を背景に、他地域との交流を示す石器が出土しています。とくに、東北地方に産出する硬質頁岩という石材を加工して製作された北海道・東北方面の石器文化の指標である北方系細石刃石器群が佐倉市域で出土していることは、当時の人々の広域的な遊動生活を物語っています。

続く縄文時代の始まりは諸説ありますが、列島最古の土器の年代は、放射性炭素14年代測定法により約1万5千年～1万6千年前という数値が得られており、旧石器時代の終末と縄文土器の出現がオーバーラップしていることとなります。

佐倉市では、約1万2千年前の土器が最古のものですが当時の居住痕跡は未だ見つかっていません。その後、弥生時代の中期前半（紀元前2～3世紀）までの1万年以上もの間縄文時代が続きます。人類は、旧石器時代から縄文時代の終わりまでの3万年以上もの間、地球規模の気候変動とそれに連動した海水面の変動を含めた地形や動植物相の変化に適応してきました。縄文時代を代表する道具である土器と弓矢の発明は食材の幅を広げ、それまでの大型動物や河川を遡上するサケ・マスを捕獲する遊動的な狩猟生活に終止符を打ち、定住生活による多角的な食糧獲得戦略へと移行しました。人々は、定住しながら周囲の自然とうまく調和して生きる「共生」へと歩き出します。そして、まさに適材適所で様々な道具を発明し、高度な技術に裏打ちされた多様な文化を創造することとなります。一方で、自然の力には抗えないこと、人の目には見えない力が働いているという思いから自然に対して畏怖の念を抱くとともに祭祀儀礼が発達します。また、周辺地域のムラとの結びつきの中で食料や道具を補完し合うことで、1万年以上もの長きにわたる持続可能な社会を築くことになったのです。

佐倉市域では、縄文時代の最古の時期から弥生時代移行期にかけて途切れることなく人々の生活した痕跡が遺跡として多数存在しています。この時代の遺跡からは、竪穴住居や貯蔵穴、落とし穴などの構築物、土器や石器に代表される実用的な道具のほか、土偶や石棒などの祭祀道具、土製・石製・骨角貝製などの各種装飾品が出土しています。なかでも、直径100mを超える環状集落や環状盛土を伴う集落、直径10mを超える大型竪穴建物を要する集落に代表される大規模かつ地域の拠点的な集落が集中して

いること、祭祀に使われたとされる土偶や各種異形土器などの特殊な遺物が多く出土していることが大きな特徴です。

ここでは、旧石器時代から縄文時代にいたる人々の生活や社会について、市内の代表的な遺跡を取り上げながらその特徴について概観します。

② 旧石器時代の遺跡

市内には、印旛沼に直接注ぎ込む鹿島川や手繰川、両河川に合流する高崎川や弥富川、そしてそれらの河川の支流に面した台地縁辺部に約 80 か所の遺跡が分布し、1 万点を超える石器が出土しています。ただし、広域かつ本格的な発掘調査が行われた遺跡は限られており、大林遺跡おおばやしに代表される南志津地区遺跡群、石神第 I 遺跡いしがみに代表される白井南遺跡群、星谷津遺跡ほしやづに代表される佐倉第三工業団地遺跡群、太田・大篠塚遺跡おおた おおしのづか、内田端山越遺跡うちだ はやまこしに代表される宮内・内田遺跡群を挙げることができます。なかでも南志津地区遺跡群からは総数約 5,400 点もの石器が出土しており、数量では市内最大です。市内でもっとも古い石器は、約 3 万 5 千年～3 万年前のものが大林遺跡、佐倉第三工業団地遺跡群の向山谷津遺跡むかいやま やづ・立山遺跡たてやま・明代台遺跡みしろだいで出土しています。また、向山谷津遺跡ではこの時期の炉跡が発見されており、下総台地の代表例として知られています。そして、1975（昭和 50）年度に調査が行われた星谷津遺跡では千葉県内でいち早く花粉・鉾物・黒曜石について科学分析が行われ、古植生や古環境の復元、黒曜石の原産地推定が行われた遺跡として著名です。これらの遺跡は、下総地域に特徴的な樹枝状に入り込んだ谷津と呼ばれる侵食谷に面した台地上に立地しています。

③ 特徴的な石器群



高岡遺跡群の北方系細石刃石器群

東北地方で最古の縄文土器が出現する約 1 万 6 千年前に、間野台貝塚で「荒屋型彫刻刀形石器」が、約 1 万 5 千年前に御塚山遺跡で「上ゲ屋型彫器」が、間野台貝塚や木戸場遺跡、高岡大山遺跡、高岡大福寺遺跡で「湧別技法」と呼ばれる北海道方面の石器製作技法で作られた細石刃さいせきじんを含む「北方系細石刃石器群」が出土しており、上ゲ屋型彫器は分布の最東端を、北方系細石刃石器群は太平洋側の分布圏の南限に近い資料としてそれぞれ位置づけられています。なお、木戸場遺跡の荒屋型彫器は関東地方では茨城県ひたちなか市後野遺跡に次いで 2 番目に早く発見されたもので、東北地方で産出する硬質頁岩けつがんで作られた完成品であることから、東北地方から人々が携えて南下してきたことを示しています。また、石神第 I 地点では、全国的にも希少な水晶製の細石刃石器群のほか、発見時は成田市新東京国際空港 No.55（古込）遺跡とともに県内最古となる石斧が出土しました。その他、約 1 万 7 千年前には下総台地が分布の中心とされる「東内野型尖頭器」ひがしうちのがたせんとうきと呼ばれる小型の尖頭器が、市内では鹿島川流域の太田・大篠塚遺跡やで出土しています。

④ 石器の石材

石器は、時期によって主に使用される石材の種類が異なります。その産地は、硬質頁岩は東北地方、黒曜石は栃木県の高原山や信州霧ヶ峰、東京都の神津島、利根川上流域のガラス質黒色安山岩や黒色頁岩、久慈川流域のメノウというように多様です。佐倉市に限らず石材の乏しい千葉県では、こうした遠距離にある産地から石材を入手していました。しかし、乏しいとはいえ、千葉県内にも銚子のチャート、上総丘陵の黒色ガラス質安山岩、チャート、玉髓、黒色頁岩、嶺岡山地の珪質頁岩が産出し、石器に使われていています。こうした限られた石材を効率よく、かつ無駄なく利用するために、印旛沼を境とする下総東部地域に「下総型石刃再生技法」や「遠山技法」と呼ばれる石器製作技法が生み出され、前者は神楽場遺跡や太田長作遺跡、向原遺跡、南広遺跡、栗野遺跡、後者は上志津芋窪遺跡、井野安坂山遺跡等、印旛沼周辺の遺跡で確認することができます。

⑤ 東西文化の交差点

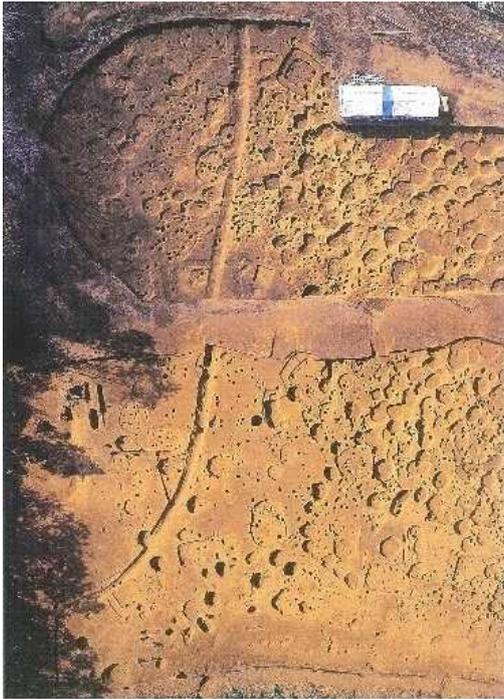
鹿島川流域に分布が集中する北方系細石刃石器群については、河川を遡上するサケ・マス漁との関連性が指摘されています。また、県内はもとより周辺地域からの石材を入手し効率よく石器を作り出す技法が生み出された下総地域にあっても、佐倉市域には西関東の技法をもつ石器も確実に存在するなど、錯綜とした状況がうかがえます。こうした状況は、下総台地の中央部に位置する佐倉市にあって、広域に及ぶネットワークの中で柔軟かつ多様性に富む生存戦略を反映していると言えます。

⑥ 縄文時代の印旛湾と貝塚

約1万2千年前、現在の印旛沼、手賀沼、霞ヶ浦は大きな内海（古鬼怒湾）を形成していた頃、鹿島川中流域の段丘上に立地する岩富漆谷津遺跡で市内最古の土器が1点のみ出土していますが、生活痕跡は未だ見つかっていません。約8千年前、内陸部にまで海水が進入するようになると、縄文人は積極的に海に出向き、漁労や貝を採取するようになります。彼らが食べた貝が廃棄され集積したものが貝塚と呼ばれるもので、市内では手繰川支谷に立地する県指定史跡の上座貝塚をはじめ、印旛沼支谷に立地する間野台貝塚や三ヶ月山貝塚がその代表例です。なかでも、昭和32年（1957）に明治大学によって発掘調査が行われた上座貝塚は、竪穴住居跡と屋外調理施設の「炉穴」が初めてセットで検出されたことで著名な遺跡です。このほか、炉穴や竪穴住居に廃棄された小規模な貝層が鹿島川支谷に立地する白井屋敷跡遺跡や太田長作遺跡、南部川支谷に立地する城山ノ作遺跡で確認されています。なかでも、城山ノ作遺跡では、市内最古となるオキシジミを主体とする貝層が、推定長軸が約17mもある大型住居跡に堆積していました。その後、約6千年前には、高崎川に面した台地上に立地する鐮木諏訪尾余遺跡で汽水産のヤマトシジミを主体とする小規模な貝層が竪穴住居に廃棄された状態で出土しています。こうした状況から、海退によって印旛湾の水質が海水から汽水へと変化していったことがわかります。

⑦ 大規模集落の出現と消長

約5千年前になると遺跡数が爆発的に増加し、主要河川やその支川沿いに直径100mを超える大規模な集落が出現します。こうした集落は、中央の広場を囲むようにドングリの貯蔵穴や墓が造られ、その外側に竪穴住居が同心円状に分布する特徴から、「環状集落」と呼ばれます。環状集落では、複数世代に



生谷松山遺跡の群集する竪穴住居と貯蔵穴

わたる長期間の居住によって結果として多数の竪穴住居や貯蔵穴が集中して造られることから、地域の拠点集落としての性格を持っています。手繰川中流域に位置する生谷松山遺跡と高崎下流域に位置する六崎外出遺跡はその典型例で、ともに推定径 100m を超える規模と推測されています。なお、生谷松山遺跡はこれまでの発掘調査の成果から、総数 100 軒を超える竪穴住居が展開すると推測されます。また、この時期には生谷松山遺跡と南側に近接する吉見稻荷山遺跡の 2 遺跡で漆液容器に使われた土器が出土していることから、佐倉市域における漆利用がこの時期まで遡ることがわかります。

その後、地球規模の寒冷期を迎えると動植物相の変化や人口圧の変化に伴って大規模な集落は解体し、人々は安定的かつ効率的な食糧と資源確保のため「分散居住」という適応戦略をとるようになります。印旛沼を眼下に望む江原台遺跡は、この時期の代表的な集落です。なお、高崎川下流の六崎貴舟台遺跡からはヤマトシジミが出土していることから、この頃の印旛沼は汽水化が進んでいたと考えられます。

⑧ 大型住居と環状盛土

約 4 千年前になると、分散していた集落が相互に連携を深めるなかで再び核となる集落が出現します。印旛沼南岸域には、国史跡の井野長割遺跡、曲輪ノ内貝塚、遠部台遺跡、吉見台遺跡、宮内井戸作遺跡、坂戸草刈堀込遺跡といった拠点集落が 2～3 km ほどの距離を隔てて分布しており、全国的に見ても分布密度が高い稀有な地域とすることができます。しかも、井野長割遺跡、曲輪ノ内貝塚、吉見台遺跡、坂戸草刈堀込遺跡のように、自然地形の窪地を囲むように環状に土が盛り上がった「環状盛土」と呼ばれる高まりを伴う集落が出現します。この盛土は、縄文人が意図的に盛り上げたことは確認されていますが、その目的や形成過程は今もなお解明されていません。これまでの発掘調査によると、盛土の内側の窪地は様々な作業空間、盛土は居住空間・廃棄空間であったことがわかっています。なかでも井野長割遺跡は、窪地にも性格が不明な周囲とは独立した盛土が 2 基存在する点で全国的にも唯一の例です。こうした拠点集落からは、遠隔地で作られた土器のほか土偶や石棒、精巧な作りの土製耳飾、亀形・海獣



吉見台遺跡の大型竪穴建物



井野長割遺跡の関西系土器

形・イノシシ形・イヌ形土製品、柄香炉形土器、異形台付土器、吊手土器、人面付き土器、ミニチュア等の多種多様な祭祀・儀礼用品、ヒスイ

や琥珀こはくといった希少価値の高い石材で作られた垂飾、共同で祭祀を行ったと考えられる巨大な建物が存在します。例えば、井野長割遺跡では推定長軸約 12mのもの 1 棟、吉見台遺跡では短軸 16.5m、最大長 19mの 1 棟を最大に、推定長軸 12m台のものが 2 棟、宮内井戸作遺跡では、直径 10mを超える大型竪穴建物が少なくとも 6 棟確認されています。

⑨ 拠点集落の解体

1 年以上続いた縄文時代も約 2 千 3 百年前には終わりを迎え、弥生時代へと移り変わっていきます。市内では、鹿島川流域の六崎大崎台遺跡むつぎおおきだいや高崎川流域の高崎新山遺跡たかきしんやまなどで弥生時代移行期の土器が出土していますが、竪穴住居は六崎大崎台遺跡むつぎおおきだいと鹿島川下流域の岩名天神前遺跡いわなてんじんまえで確認されているのみです。それまで印旛沼沿岸や主要河川沿いに分布していた拠点集落は姿を消し、集落は限定的かつ小規模なものになります。このことは、単に人口が減少したためなのか、生活の舞台が台地から低地に移ったために竪穴住居が見つげにくいだけなのか、この時期の様相はまだよくわかっていません。ただし、続く弥生時代になると岩名天神前遺跡は墓域として、六崎大崎台遺跡は拠点集落として利用されるようになることから、時代とともに地域社会が再編成されたことがうかがえます。

(2) 弥生時代・古墳時代の佐倉

① 概略

弥生時代はそれまでの狩猟・採集から生活様式を大きく変化させ、大陸からもたらされた水田稲作を主に生業とした時代です。弥生時代の始まりは、紀元前 10 世紀頃からと考えられ、金属器など最新の技術も伝播しました。水田稲作は集落の構成員たちが水田づくりという土木工事を共同で行い、収穫という目的のために集落全体で管理するという生活スタイルに変化させました。

弥生時代の佐倉は、河川の豊富な水源と水田稲作に適した谷津が多くあることや霞ヶ浦や手賀沼、印旛沼が一体となった内海である香取海や東京湾沿岸などの文化圏を行き来する人々の移動や交流を背景に、特色ある遺跡が見つまっている地域です。

続く古墳時代の佐倉は、畿内のヤマト王権の支配下にありました。古墳時代は前方後円墳に代表される首長墓としての古墳が造営された時代で、墳丘規模が大きいほどその勢力は強かったと考えられます。千葉県内でも 100m を超える規模の古墳がありますが、佐倉周辺を治めていた印旛国造は、本拠地を印旛沼北東岸の龍角寺古墳群がある栄町付近に置き、80m 程の大型の前方後円墳や方墳が築造されました。しかし、佐倉市内の古墳は最大でも 40m 程であるため、より下位の豪族の墓と考えられるものの、香取海や主要河川に面した台地上にあることから、その水運を掌握した豪族たちの古墳と思われます。なお、7 世紀中葉以降には古墳は造られなくなり、終末期方墳から初期寺院の造営へと移行していきました。

② 再葬墓研究のはじまり—岩名天神前遺跡—

千葉県内でも最古段階となる弥生時代中期中葉（紀元前 2～3 世紀）の岩名天神前遺跡は、芋穴掘りの最中に偶然土器が発見されたことを契機に、明治大学により発掘調査が行われました。7 基の墓壙が見つかり、うち第 2 号墓壙での出土状況は、1 つの土坑に複数の壺を中心とした土器が埋納され、壺の中には成人人骨が残っていました。これは一度埋葬した後に白骨化した人骨を改めて埋葬した「再葬墓」の発見であり、弥生時代の墓制研究の端緒となりました。最も古い弥生時代の墓壙が発見された遺跡であり、市内では岩名天神前遺跡でのみ出土しています。



岩名天神前遺跡

出土土器には、在地の須和田式の他、西関東系や北関東系も含まれ、関東地方の北と南の文化の接触地帯としての様相がうかがえます。再葬墓は東日本で広く盛行した墓制ですが、佐倉市内では生活の場所である集落は見つかりません。

③ 環濠集落の東限 六崎大崎台遺跡とその周辺のムラ

中期後葉から後期前半（紀元前 2 世紀～紀元 1 世紀頃）には鹿島川と高崎川が合流する地点を望む台地上に立地する六崎大崎台遺跡において、集落を囲む径 140m の環濠集落が営まれます。環濠は V 字状で深さ 2m もあり、敵から集落を守る防御施設と考えられます。弥生時代中期から後期までに発見された住居の総数は 150 軒以上あり、遺跡からは多数の大陸系磨製石斧や板状鉄斧、農耕具である石包丁が

出土するなど、印旛沼周辺を代表する拠点集落でした。また、環濠の中心には 22m程の巨大な首長墓と想定される方形周溝墓が造営され、近隣の六崎・寺崎・太田といった同一水系にある地区でも六崎大崎台遺跡と同時期の住居跡や方形周溝墓群が確認されています。また、方形周溝墓の溝からは底に故意に穴をあけた土器が出土することがあり、埋葬に関わる祭祀行為と考えられています。



六崎大崎台遺跡の航空写真

出土土器では、六崎大崎台遺跡を標式とする弥生時代後期前半の「大崎台式土器」があります。この土器は福島・茨城県下の土器の影響を受けており、地域間の交流があったことが分かります。

④ 印旛沼周辺の土器「白井南式土器」

弥生時代後期には、白井南遺跡群において、印旛沼南岸地域の特性を示す「白井南式土器」が出土しています。特に甕形土器は口縁部から肩部にかけて輪積痕を残す南関東の要素を持ち、肩部から底部にかけては附加条縄文による施文を施す東関東の要素を持つものです。この土器群は、本遺跡から北東に約 2.5 kmの江原台遺跡や印旛沼周辺の遺跡でも確認されており、地域の特徴を表す資料です。



白井南式土器



パレススタイル壺(底部穿孔)

また、紡錘車と呼ばれる糸をつむぐ道具も多く出土しており、織物生産が盛んだったこともわかっています。

弥生時代の終わりから古墳時代出現期には、白井地区の渡戸B地点で方形周溝墓が見つかっています。出土した東海地方西部系のパレススタイル壺2点は、いずれも葬送儀礼のために底部が穿孔されていました。このような装飾壺の出土は、東海地方からの文化の流入と次の古墳時代への胎動を見ることができます。

⑤ 香取の海や主要河川の水運を掌握した豪族の古墳

古墳時代になると、畿内のヤマト王権との繋がりを示すために、豪族たちは同様の形状をもつ古墳を盛んに築造しました。3世紀末から4世紀前半にかけて築造された飯郷作遺跡（県指定史跡）は、前方後方墳2基と方墳2基、方形周溝墓23基で構成されます。全長25mの前方後方墳の埋葬施設からは、銅鏃やガラス玉が出土しており、印旛沼周辺の首長クラスの墓域と考えられます。また、全長41mを測る天辺内山1号墳は、4世紀前半に造営された市内最大の前方後方墳であることが判明しています。



石枕(先崎高塚1号墳出土)



人物埴輪(飯塚古墳群出土)

続く中期の岩名2・3号墳では、方墳2基を調査したところ埋葬施設から多数のガラス玉が出土しました。また、印旛沼周辺の古墳からは先崎高塚古墳などで、死者の枕である石枕の出土例が6例あり、その他埋葬施設から銅鏡が出土した中期の古墳は、印旛沼を臨む台地上に多く見られることから、水運を掌握していた豪族の墓であったと考えられます。

佐倉市の遺跡では全長100mを超える巨大な古墳は見られませんが、後期では200基以上の群集墳である岩富古墳群が5世紀後半から7世紀代にかけて形成されています。この古墳群では、5世紀末葉に築造された大作31号墳での馬具を装着した馬の殉葬例や全長約30mの前方後円墳である野中5号墳では箱式石棺から多数の挂甲小札が、池向11号墳では銀象嵌鍔の直刀が出土しています。高崎川を望む台地先端にある石川阿ら地遺跡では、銀象嵌の鏢をもつ直刀2本が出土し、中央政権から下賜された可能性を含めてその密接な関係がうかがえます。

また、埴輪を有する古墳として、馬渡姫宮古墳や将門2号墳など10基程度が確認されています。埴輪の胎土分析の結果では、6世紀前半の市内の埴輪のいくつかは茨城県筑波山麓などで作られたものと判明し、香取海の水運によりもたらされたと考えられます。

⑥ 古墳群を造営した集落と工人集団

古墳時代の集落の特徴を時期ごとに見ると、前期では高岡大山遺跡、六崎大崎台遺跡などで環濠が見つかっており、弥生時代の環濠集落に見られたような、戦争時における緊張状態が依然として継続していたことを示しています。この時期の出土土器には畿内系や北陸系、東海系など他地域との交流をうかがわせるものが発見されています。

続く中期になると、白井田小笹台遺跡や岩富漆谷津遺跡などで滑石製品の玉作製作跡や、上座矢橋遺跡では鍛錬工程を行った製鉄工房など、新しい技術を携えた工人が居住していた集落が見つかっています。千葉県内の滑石製品の製作遺跡



滑石製模造品(鏡・勾玉・剣)

は、香取海周辺や現利根川沿いに分布しており、鏡や勾玉、剣など、ミニチュアの祭祀具である模造品を製作しています。その原材料の滑石は、利根川上流域から運ばれており、市内の滑石製品の製作遺跡も主要河川沿いに立地しています。佐倉市の遺跡では、石製模造品を製作するとともに自らのムラでもこれらを使用した祭祀を行っていたと考えられます。

後期になると集落数は爆発的に増加しますが、特に岩富古墳群の周辺にはその造墓集団の集落が形成され、150軒程の竪穴住居跡が見つかっています。また古墳群に隣接していない高岡大山遺跡でも後期以降、100軒程度の集落が営まれています。6世紀以降には農具や工具、武器などの鉄製品が多数出土するようになり、本格的な鉄生産が開始されたことがわかります。7世紀中葉になると、古墳は築造されなくなりますが、拠点的な集落では奈良・平安時代にも継続してムラは営まれています。

(3) 古代（奈良時代・平安時代）の佐倉

① 概略

古墳時代が終わりを迎える頃から、天皇を中心とした中央集権国家が整備されます。奈良・平安時代には、大宝律令（701年制定）などの法律を基にした律令国家が成立し、公地公民制のもと戸籍が作成され、「班田収授法」という税の仕組みも作られました。また、畿内以外の国々を東海道・東山道・北陸道・山陰道などの七道に分け、現在の佐倉市が含まれる下総国は東海道に属していました。これらの国々の往來のために官道が設けられ、佐倉市には9世紀初頭まで都と結ぶ官道が南北方向に通っており、これを「古東海道」と呼んでいます。

また、初期寺院である長熊廃寺を中心に仏教の普及や当時の最新技術がもたらされた地域でもあり、印旛沼周辺を代表する拠点集落も見つかっています。これらの集落での生活を支える製鉄や須恵器生産を行う技術者集団も居住していました。

当時の政府は、農地や水田の開墾を推奨し、「三世一身の法」や「墾田永年私財法」により、有力氏族や社寺などの私有を認めたことで、土地が積極的に開発されていきました。その影響は佐倉での集落数の増加にも現れています。しかし、繁栄していた奈良・平安時代の集落は、東国一帯の様相と同じく10世紀以降激減し、台地上から姿を消しています。この時期は律令体制が崩れ、災害の頻発や平将門の乱など争乱が度々あり、それまでの生活から大きな転換期を迎えています。

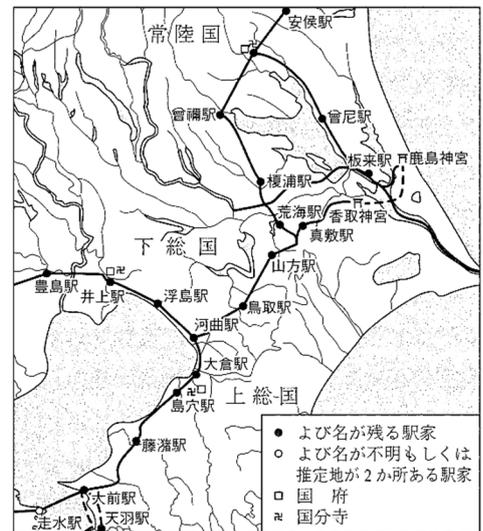
② 古東海道を介した都とのつながり

奈良・平安時代の佐倉市域の大部分は、律令制度下では下総国印旛郡に含まれていました。平安時代前半の百科事典である『和名類聚抄』には、印旛郡の11の郷名の記載があり、うち長隈・鳥矢・日理・余戸が市域の郷名とされています。

8世紀になると、佐倉市東部に都からの往來のための官道である古東海道が南北方向に通ります。これは中央と地方の役所をつなぐ重要な交通路であり、30里（約16km）毎に都への情報伝達のための駅馬が用意され、現在の神門付近に「鳥取駅家」が置かれたと推定されています。

古東海道は9世紀初頭には下総国府を通るルートに変更になり、この道は官道としての役目を終えます。しかし、官道ではなくなっても道路として利用されていたと考えられ、八木山ノ田遺跡では8世紀後半から9世紀中葉の側溝を含めた幅6mの道路状遺構が東西方向に延びており、古東海道に接続する支線道路の可能性ががあります。

このように佐倉は香取海での水上交通と古東海道が交わる水陸交通の要衝であったため、大規模な集落が営まれました。古東海道沿いの佐倉市域の集落には役人が使用していた帯金具や畿内産土師器などの食器類をはじめ畿内や伊勢、東海、甲斐地方など様々な地域の文物が多く出土することから、都があった畿内や周辺地域との交流が盛んであったことがわかります。



古東海道の経路図
（『千葉県の歴史 通史編古代2』より）

③ 仏教の普及と神への信仰

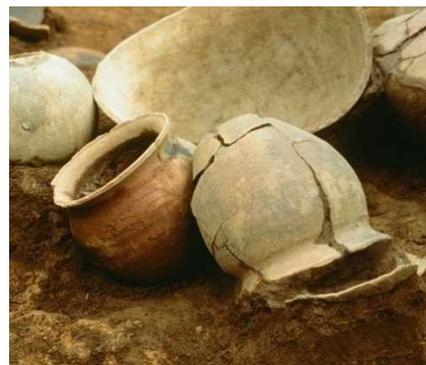
古墳時代に拠点集落があった高岡大山遺跡周辺には、香取海を介して茨城県と交流のあった豪族により、奈良時代に瓦葺寺院である長熊廃寺が建立され、この寺院を起点に周辺の集落に仏教が広まりました。ムラのお堂と考えられる小規模な仏堂の遺構が、六拾部遺跡や内田端山越遺跡、江原台遺跡などで安置された瓦塔とともに見つかっています。また仏教の普及の下、その葬制である火葬蔵骨器も高岡新山遺跡で出土しています。この火葬蔵骨器の被葬者は当地域の首長層の豪族と考えられます。

そして、印旛沼周辺は文字などが書かれた墨書土器等が多く出土する地域です。長熊廃寺の近くに立地する高岡大山遺跡では、整然と並んだ倉庫と考えられる掘立柱建物群と400軒以上の竪穴住居が検出され、752点にも及ぶ墨書・刻書土器や、高級食器である緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、官衙関連遺跡と考えられています。当時の政治や行政は官僚制度により行われ、中央や地方の役人は文書の読み書きが必要であったため、佐倉市域には多数の役人たちが居住していたと思われまます。

また、江原台遺跡及び八木山ノ田遺跡では、当時の信仰を示すものとして、「神屋」・「仏」の文字や神仏の顔を描いた人面墨書土器も出土しており、祭祀儀礼など精神世界の一端もうかがえます。



火葬蔵骨器(高岡新山遺跡)



仏面墨書土器出土の様子

④ 須恵器を生産した工人の集落

佐倉市内には須恵器の生産遺跡があります。鹿島川水系の内田端山越遺跡では、8世紀第4四半期から9世紀中葉の須恵器窯3基と粘土採掘穴、ロクロピットをもつ工房など一連の窯業施設が見つかりました。須恵器はそれまで使用されていた土師器とは違い、専用の窯で1,000度以上の高温で焼成し、須恵器特有の製作技法や燃料となる薪の調達などが必要で、印旛沼周辺では限られた場所で見つかりません。この遺跡は古東海道という官道と鹿島川沿いという立地を選び、住居数170軒以上の集落が形成されていました。陸路と水上交通の利便性をこの地に求めたと考えられます。同じ鹿島川流域の千葉市には、中原窯や宇津志野窯など、ほぼ同時期の須恵器窯が数基あり、窯の構造や製品の調整技法も類似しており、同一系統の工人集団であったと見られ、河川を介した繋がりが考えられます。このような工人集落は、地域の郡司層や有力氏族の求めに応じて開窯したと想定されます。



内田端山越遺跡出土の須恵器

この他にも佐倉市域の平安時代の集落では、フイゴの羽口や鉄滓など製鉄関連遺物が出土しており、日常的に使用する農具や工具の生産やリサイクルのため、鍛冶の専門技術をもつ工人が居住していたと考えられます。

(4) 中世（鎌倉～安土・桃山時代）の佐倉

① 概略

時代区分でいうと平安時代末期（1160年頃）から関東では安土・桃山時代までを「中世」とするのが一般的です。この時代は、軍事を担った武士たちが勢力を伸ばし、自らの政権を樹立しながらも離散集合を繰り返し、「天下人」による全国的な統一政権の樹立へと向かっていた時代と位置づけられます。

中世の佐倉もその例に漏れず、武士の支配・分裂を軸にしながら時代を見ることができます。鎌倉幕府の成立にともない、佐倉市域の荘園を支配していた在地領主に代わって千葉氏が勢力を伸ばし、佐倉市域は千葉氏の支配下に置かれました。その後、室町時代に関東全域を巻き込んだ「享徳の乱」がおこると千葉氏は分裂し、戦国の動乱へと巻き込まれました。

この動乱の中、千葉氏はその本拠を佐倉に移し本佐倉城を築きました。白井城では二度の大きな合戦があり、16世紀中頃に白井城主となった千葉氏重臣の原氏が、小田原の北条氏に従いながら勢力を伸ばしました。しかし、戦国時代末期、小田原北条氏が滅ぶと、佐倉を支配していた領主も大きく様変わりすることになります。つまり、北条氏に従っていた千葉氏、原氏は没落し、代わって関東地方を支配することになった徳川家康の一門や家臣が、佐倉を治めることとなったのです。その後、家康が全国政権を樹立するなかで、中世の城郭は姿を消し「近世」という新たな時代を迎えることとなります。

② 佐倉市域の在地領主と千葉氏

平安時代末期から鎌倉時代の佐倉市域は、「白井^{しろい}荘」、「印東^{いんとう}荘」、「白井^{うすい}荘」からなり、白井氏・印東氏・白井氏といった両総平氏の在地領主がそれぞれの荘園・地域を実質的に支配していました。同じころ、現在の千葉市中央区周辺である「千葉^{ちば}荘」を中心に勢力を伸ばしていたのが千葉氏です。

源頼朝が平家打倒の兵を挙げた際、当時の千葉氏の惣領であった千葉常胤^{つねたね}は、いち早くこれに味方し、有力御家人としての地位を固めていきました。千葉氏が勢力を伸ばしたのに対し、印東氏は平家側に従って勢力を失いました。宝治元年（1247）、幕府執権の北条氏と有力御家人の三浦氏との間でおこった「宝治合戦」では、千葉氏宗家は北条氏に接近したのに対し、白井氏や白井氏は三浦氏に味方し合戦に敗れたため、勢力を失いました。これにより、佐倉市域は千葉氏の支配下に置かれるようになったのです。

千葉氏の台頭とともに勢力を失った白井氏や白井氏ですが、その一族が室町幕府を開いた足利尊氏に仕えていたことがわかっています。白井氏の一族である白井行胤^{ゆきたね}は、尊氏の近習として仕え京都や鎌倉で活躍しています。白井興胤^{おきたね}もまた尊氏に仕え、各地を転戦したのち、暦応元年（1338）に白井の地を安堵され、白井氏中興の祖となったと伝えられています。白井城の基礎が築かれたのもこのころと考えられています。市内に残る「お辰の碑」や「宝樹院のサザンカ」などを通じて、興胤にかかわる伝承は今も語り継がれています。



佐倉市域の在地領主の勢力範囲イメージ
(高橋富人『佐倉市域の歴史と伝説』より、
外山信司の監修のもと一部加筆)

③ 千葉氏の分裂



白井城跡(空撮)

室町幕府の成立後も佐倉市域を治めていたのは千葉氏でしたが、享徳3年(1454)の「享徳の乱」で大きな転換点を迎えることとなります。享徳の乱は、鎌倉公方(のちに古河公方)の足利成氏と、室町幕府の援助を受けた関東管領の上杉氏の対立を軸にし、諸勢力が双方に分かれて合戦をはじめ、関東地方が戦国の世に突入するきっかけとなった内乱です。

この時の千葉氏の惣領であった千葉胤直と重臣の円城寺氏は上杉方を支持し、有力な一族である馬加康胤と重臣の原胤房は成氏に味方したため、千葉氏は分裂しました。康正元年(1455)、胤直は康胤、胤房に攻められ、子の胤宣たちとともに自害し、千葉氏の惣領の地位は康胤が継承しました。

胤直の甥の実胤と自胤は康胤に対抗し、幕府からは二人を支援するために東常縁らが派遣されました。康胤は翌年に常縁に敗れ戦死し、千葉氏の家督は、康胤の長子の胤持、その早世後は現在の酒々井町岩橋を本拠にしていた一族の輔胤が継承しました。応仁元年(1467)、西国で応仁の乱がおこると東常縁は上洛を余儀なくされ、この間に輔胤は力を盛り返していきます。

④ 戦国の動乱と本佐倉城・白井城

現在の佐倉市と酒々井町にまたがる「本佐倉城」は、輔胤あるいはその子である孝胤によって文明年間(1469~84)の頃に築かれたと考えられています。以後、本佐倉城は下総千葉氏の本拠地となりました。文明3年(1471)、足利成氏は上杉方に攻められ、古河城から脱出し孝胤を頼るなど、享徳の乱において下総千葉氏は主に公方方につき活躍しました。本佐倉城の築城も成氏の古河城を支えるためだったと考えられています。

佐倉市内で戦国の激戦の舞台となったのは「白井城」でした。文明10年(1478)に公方方と上杉方の間で和睦が成立し、幕府と公方方との和睦交渉が進められ、ようやく享徳の乱も終わりが見えてきました。太田道灌を中心とする上杉方は、反乱を起こした長尾景春に与する孝胤を討ち、上杉方である自胤に千葉氏惣領の地位を継承させるため下総に進攻しました。孝胤は上杉方と境根原(柏市)で戦い敗れたのち、白井城へ退き籠城しました。翌年に白井城は落城し、孝胤は撤退しますが、上杉方では太田道灌の弟(甥とも)である太田図書助資忠らが討死するなど激戦が繰り広げられました。

この後、道灌は景春方と戦い、文明12年(1480)に長尾景春の乱が終息しました。そして、幕府と公方方の和睦交渉が進み、文明14年(1482)に和睦が成立し、約30年に及んだ享徳の乱がようやく終わりました。長く続いた乱により、古河公方や関東



本佐倉城跡(空撮)

管領は政治的影響力を大きく失い、これ以降、彼らの存在・意思と関係なく関東の社会が動くことになりました。これにより、地域の自律・自立した動きがもたらされたと評価されています。

また、文亀2年(1502)から永正元年(1504)の3年間にわたって、古河公方足利政氏と高基父子が、孝胤を攻めるため、佐倉市大篠塚・小篠塚一帯に「篠塚陣」と呼ばれる在陣をしていたことが判明しています。実態は不明なものの、古河公方が佐倉市域に動座していたことは注目されます。



伝千葉勝胤肖像

このころの本佐倉城の城下には市が立てられ、商職人の集住が進み、城下町としてのにぎわいがみられたようです。また、孝胤の子勝胤は和歌を好み、永正11年(1514)には歌人の納叟馴窓に『雲玉和歌抄』を編纂させるなど、佐倉歌壇と呼ばれる文化的なネットワークが形成されました。城跡からは高価な貿易陶磁も出土しており、守護の系譜を引く千葉氏はこれらの威信財によって、房総の名門武家としての家格の高さを示そうとしました。

16世紀前半、小田原の北条氏や安房の里見氏が戦国大名として勢力を広げ、房総半島で抗争を広げるころ、下総の千葉氏や原氏などの国衆は、両氏の間で揺れ動いていました。永正14年(1517)、小弓原氏を真里谷武田氏が追い落とすと、翌15年(1518)に古河公方足利高基の弟義明が小弓城(千葉市中央区生実町)へ入り、小弓公方となります。義明は、里見氏や真里谷武田氏らの支援のもと一時勢力を拡大し、兄高基と骨肉の争いを繰り広げ、その勢力は本佐倉城周辺にも攻め入りました。この過程で、白井氏は高基方から義明方へ寝返り、両者の争いに大きな影響を与えました。しかし、天文7年(1538)、小弓公

方・北条氏両軍が激突した第1次国府台合戦で義明が討死すると、小弓公方に属した白井氏も勢力を失っていき、古河公方に属した原氏の勢力が進出しました。

小弓公方を事実上滅ぼした北条氏は、傀儡とした古河公方の権威のもとで下総への進出を本格化させました。千葉氏と原氏は、里見氏との抗争の中で北条氏を頼った結果、その影響下に入りました。本佐倉城跡からは、北条氏が用いた手づくねで作られたかわらけが出土するなど、考古遺物の面からも千葉氏と北条氏との政治的な関係性をみることができます。

天文年間(1532~54)の頃、当時の千葉氏当主の親胤は、一族の鹿島幹胤に鹿島山の台地に新たな城の建設を命じました。しかし、親胤は若くして亡くなったため、工事は中断されてしまいました。また、16世紀の半ばには、原氏が白井氏を追って白井城に入り、本拠地としました。

原氏は北条氏との結びつきをさらに強め、下総における北条氏方の中心となり、千葉氏に匹敵する勢力となった原氏とその家臣たちは「白井衆」と呼ばれました。そうしたなか、北条氏と対立していた越後の上杉謙信は、里見氏の要請に応え関東に出兵し、永禄9年(1566)に原氏の白井城を攻めました。上杉氏・里見氏方が戦いを優位に進め、白井城の本丸の手前まで攻め寄せ、落城寸前まで追い込みました。しかし、籠城側の健闘と北条氏から送られた援軍により城はもちこたえ、謙信は敗退しました。この合戦後も白井城は改修され、白井田宿内砦などの支城を含む大規模な城になりました。

⑤ 徳川家康の関東入封と佐倉

その後、北条氏は里見氏を事実上の降伏に追い込むなど、着実に関東における影響力を強め勢力を伸ばしました。一方、千葉氏は、天正13年（1586）に当主の邦胤が殺害されると北条氏政の実子の直重が家督を継承するなど、北条氏の強い介入を受けました。直重の代にも鹿島城の建設が試みられたようですが、城は未完成に終わったとされています。

そして北条氏は、天下統一を進める豊臣秀吉とは対立しつつも共存の道を模索しましたが、和睦交渉が決裂し合戦に及びました。秀吉が率いる大軍勢に敗れ、天正18年（1590）に北条氏は滅亡し、千葉氏、原氏はともに北条氏方についたため命運を共にしました。千葉氏にゆかりの深い海隣寺や勝胤寺には、戦国期の千葉氏歴代当主の菩提を弔う供養塔が残されており、かつての繁栄がうかがえます。

北条氏滅亡後、代わって関東を支配したのは徳川家康でした。佐倉市域にはその一門や家臣が配置され、佐倉の領主も大きく様変わりしました。本佐倉城周辺には陣屋が築かれ、家康の五男武田信吉が置かれ、白井城には譜代の家臣である酒井家次、鹿島城には久野宗能が配置されました。また、北条氏の一族で玉縄城主であった北条氏勝は、秀吉の小田原攻めの際に降伏し家康の家臣となり、弥富原氏に代わって岩富城主となりました。



岩富城主北条氏勝寄進資料 三鱗紋蒔絵四重椀

その後、家康が関ヶ原の戦いに勝利し、全国支配を着実に進めると、大名や家臣団の再配置が進みました。信吉は慶長7年（1602）に水戸に移り、代わって本佐倉には六男の松平忠輝が入りましたが、翌年川中島に移され陣屋は廃されました。また、白井城、岩富城も城主の転封とともに廃され、慶長末頃には鹿島城が残るのみとなりました。このように徳川家の家臣団の入封・転封にともない、戦乱の舞台となった中世以来の城郭は姿を消し、新たな時代の幕開けを迎えることとなります。

(5) 近世（江戸時代）の佐倉

① 概略

江戸の将軍・幕府を中心として、大名が各地域の藩を治める幕藩体制下にあったこの時代、佐倉市域で藩政の中心となったのは佐倉城です。慶長15年（1610）、土井利勝が佐倉の領主となり、その翌年から築城が開始され、7年の歳月をかけて佐倉城が完成しました。城下町も整備され、佐倉城は江戸を守る要衝のひとつに数えられました。

その後、有力な譜代大名が相次いで藩主となり、佐倉藩主としては堀田氏が広く知られています。寛永19年（1642）、正盛が堀田氏としてはじめて藩主となりました。その子の正信は、幕政批判などを行ったため領地を没収され、その後、松平氏、大久保氏、戸田氏、稲葉氏らが藩主となりました。延享3年（1746）、正盛の曾孫の正亮が山形から佐倉へ入封した後は、堀田氏が佐倉藩主となっています。

江戸時代末期、堀田正睦は幕府の老中を二度務め、藩主としても様々な改革を行いました。特に教育に力を入れ、藩校の成徳書院を拡充し、蘭学を中心とする洋学を積極的に取り入れました。このころ、江戸で活躍していた蘭方医の佐藤泰然が、佐倉に蘭医学塾兼診療所の「順天堂」を開き、最先端の医学教育とその実践を行いました。正睦の後を継いだのは正倫で、彼が最後の佐倉藩主となりました。明治維新後、陸軍歩兵連隊が佐倉におかれることになると、佐倉城の建物のほとんどが撤去され、次の時代への一歩が踏み出されました。

② 佐倉城の築城と城下町

慶長15年（1610）に土井利勝が佐倉の領主となり、翌年より築城に着手します。利勝は、かつて千葉氏が新たな拠点として未完成のままであった鹿島城があった場所を選び、約7年をかけて「佐倉城」を完成させました。佐倉城が築城されたころは、徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利し、征夷大將軍となっ



佐倉城復元 CG

て幕府を開き、大坂の陣により豊臣氏を滅ぼして全国支配を確固たるものにした時期に重なります。家康が全国を支配下に収める過程で、徳川家の家臣団や大名の配置換えが行われ、佐倉城の完成までに本佐倉の陣屋、白井城、岩富城といった中世以来の城郭は姿を消しました。

江戸時代の初めに新たに整備された城と城下町は、守るのに適した険しい山のような場所ではなく、水陸交通の要衝で平坦な土地が選ばれるようになりました。軍事面だけでなく政治・経済的にも領土の中心にふさわしい場所に城が築かれ、町が整備されたのです。

佐倉城も新しい時代にふさわしい場所に築城されました。北・西・南の三方を崖に囲まれた台地の上に築かれ、東に伸びた尾根筋に城下町が建てられました。大手門東の宮小路、鐮木小路、海隣寺並木などに武家地が置かれ、宮小路の東に新町、城の北に田町といった町人地が配置されています。鐮木小路には、「旧河原家住宅」（千葉県指定文化財）、「旧但馬家住宅」（佐倉市指定文化財）、「旧武居家住宅」（国

登録文化財)などの武家屋敷が今も残っています。「新町」は、この時新たにつくられた町であることからこの名が付けられました。城下町には、江戸と成田を結ぶ佐倉道(成田街道)が通り、交通の要衝でもあったことがうかがわれます。

佐倉城の縄張り(城全体の設計)は、戦国時代から発達してきた城普請の集大成のひとつに数えられています。石垣を用いず、土塁と空堀・水堀を巧みに配置し守りを固めたのです。椎木曲輪の角馬出しはその代表例で、現在の佐倉城址公園内にも当時の名残をよく見ることができます。

③ 歴代の佐倉城主と堀田氏

佐倉城は、江戸の東を守る要としての役割が与えられ、築城から明治に至るまでの258年間に9家20人の有力な譜代大名が城主となりました。彼らの多くは老中などの幕府の要職を務めました。このうち、堀田正盛、正信の時代と正盛三男の正俊の孫である正亮まさきりから最後の城主となった正倫までの時代を合わせた141年間は、堀田氏が城主を務めました。

寛永19年(1642)、正盛が信濃国松本より佐倉に入封し、堀田氏の中ではじめて佐倉城主となりました。正盛は将軍徳川家光の近習を務めていたこともあり、破格の出世をとげました。しかし、子の正信は、幕政を批判し幕府に断りなく江戸から佐倉に帰ったため、万治3年(1660)に改易されてしまいました。

以降は、松平氏、大久保氏、戸田氏、稲葉氏といった譜代大名が城主でした。そして、延享3年(1746)に正盛の曾孫の正亮が山形から佐倉へ入封した後は、明治維新まで堀田氏が城主となっています。彼の代に1万石加増され、堀田氏は11万石となりました。また、このころに総合武術である立身流が堀田氏の武術として採用されています。正亮のあとを継いだ正順まさありは寛政4年(1792)に佐倉学問所を開設し、次の代の正時はこれを温故堂と改称しました。次の正愛まさちかの代には佐倉城の天守が火災により焼失したり、多額の借金に悩まされたりなど苦境が続きました。



堀田正睦肖像写真



伝・堀田正盛坐像
(佐倉市指定文化財)

若くして病死した正愛の後を継いだのが正睦まさよしでした。文政8年(1825)に藩主となり、渡辺弥一兵衛治らを用い藩の財政を立て直すなどの改革を進めました。幕政では、天保の改革期、安政年間の2度にわたり老中を務め、2度目の老中就任の際には開国派として幕政を主導し、日米修好通商条約の調印のため尽力しました。しかし、将軍の後継者問題に絡んで大老となっていた井伊直弼と対立し、安政5年(1858)に老中を罷免され、翌年家督を嫡子の正倫まさちかに譲って隠居し、元治元年(1864)に佐倉城松山御殿で亡くなりました。

正倫が家督を継いだのはわずか9歳で、重臣たちに支えられながら、幕末・明治の混乱期を迎えます。戊辰戦争の折には、正倫は慶喜の助命のために上京するもその途上で捕らえられ、京都で軟禁されます。その間に佐倉藩は新政府に恭順することになりました。明治2年(1869)の版籍奉還により正倫は藩知事に任命されましたが、明治4年(1871)の廃藩置県によりその任を解かれ、東京へ移住するため佐倉を離れることになりました。

④ 江戸時代の佐倉を今に伝える文化財



佐倉城大絵図(佐倉市指定文化財)

江戸時代の佐倉藩政資料として「下総佐倉堀田家文書」があります。この資料は佐倉藩の藩庁文書や堀田家の文書・記録が幅広くまとまっている基礎資料群として位置付けられ、佐倉市史の編纂はもちろん、千葉県、近隣の市町村史の編纂にも参照されてきました。その他にも「佐倉城大絵図」(佐倉市指定文化財)や「総州佐倉御城府内之図」(佐倉市指定文化財)といった城下町ならではの城絵図も多く残り、城やその

城下の変遷をうかがい知ることができます。

より身近な生活の様子を知る手がかりとしては、江戸時代中期の藩主・稲葉氏に仕えた渡辺善右衛門によって書かれた「古今佐倉真佐子」(佐倉市指定文化財)があります。この記録には、当時の城下町を中心とする佐倉領内の人々の生活や自然、食べ物、年中行事などが細かく描写されています。さらに、佐倉城だけでなく、藩士が暮らした武家地、町人が暮らした町人地といった城下からは様々な考古資料が発掘され、当時の人々の生活をより具体的に私たちに教えてくれます。

当時の人々が広く心を寄せたのが市内の神社や仏閣です。武家地と町人地の境に位置する鐺木町の麻賀多神社は、佐倉城下の総鎮守として広く信仰を集め、武具などの各種の寄進を受けるとともに、たびたび造営されました。現在の本殿は、天保14年(1843)に当時の藩主・堀田正睦が新たに建て替えたものです。秋には神輿の渡御が行われ、現在行われている佐倉の秋祭りの母体となっています。「古今佐倉真佐子」にはこの麻賀多神社の神輿のほかに、山車や屋台が練り歩き、多くの人々にぎわったと記録されています。また、松林寺や宗圓寺、嶺南寺、甚大寺などの城下に位置する寺院の多くは江戸時代初期～中期に開かれました。加えて、上志津の八幡神社、天御中主神社、先崎地藏尊、大佐倉の将門山大明神鳥居、寺崎の密蔵院薬師堂といった城下以外の市内各所に残る寺社などが建立・造立されたのもこの時期です。当時から佐倉の人々が篤い信仰を寄せていたことがうかがわれ、これらの寺社は現在も佐倉の人々に親しまれています。

そして、当時の人々の往来を支えたのが街道です。江戸と佐倉を結ぶ道は佐倉道と称され、江戸時代中頃以降は成田山新勝寺への参詣者が増えたことから成田街道とも呼ばれるようになりました。往来する人々の増加により、街道沿いには宿場が設けられました。かつて臼井城があった臼井は東西に走る成田街道と南の千葉街道、北の木下街道が分岐する交通の要所として、旅人や幕府の役人も往来する宿場として栄えました。また、成田街道沿いの「加賀清水」は、藩主・大久保加賀守忠朝が江戸への参勤交代の折に愛飲したことからその名が付けられ、当時の人々にも親しまれました。その一人に七代目市川團十郎もおり、成田山への道と清水の案内を兼ねた道標を井野に寄進しています。



佐倉道(成田街道)道標

また、北総地域は古くから馬の産地として知られ、台地上に牧が開かれていました。江戸幕府はこれを継承し、直轄の牧場として7つの牧を「佐倉牧」として整備しました。これらの牧は現在の佐倉市域の外に位置していましたが、享保7年（1722）以降、享保の改革に伴い、7つのうちの3つの牧が佐倉藩の管轄下に置かれることとなりました。佐倉藩の管轄した3つの牧については「佐倉牧関係絵図」（佐倉市指定文化財）により知られています。絵図には牧周辺の情報も詳細に書かれており、当時進められていた新田開発に必要な情報も記録されたと推測されます。

新田開発が進められていくとともに、牧の利用が進められ、牧とその周辺では植林が盛んに行われ、木材が取引されるようになりました。この木材を利用した炭の生産も盛んになり、「佐倉炭」として江戸に出荷され、火持ちや見た目が良いことなどからブランド炭として高く評価されました。また、幕末期には江戸屋敷の御用炭の取り捌きが平井家をはじめとする城下の商人たちに認められ、鹿島川・印旛沼につながる田町の河岸から出荷されたことがわかっています。

⑤ 蘭学の先進地

佐倉藩では藩校で儒学と武芸が教授され、文武が振興しました。藩の剣術であった「立身流」（千葉県指定文化財）は、総合武術の姿を今に伝えています。江戸時代後期の佐倉は、藩校の成徳書院、順天堂に代表される蘭学の先進地でした。成徳書院は、天保7年（1836）に藩主・堀田正睦によって拡充され、蘭学を中心とする洋学が積極的に取り入れられました。正睦は、洋式の兵制を採用し、藩校を拡充して成徳書院としました。積極的に蘭学を導入したことから「蘭癖」とも称され、彼によって佐倉が蘭学の先進地となる下地がつけられました。成徳書院に所蔵されていた「ハルマ和解」をはじめとする蘭学・洋学関係の資料は、当時としては有数の蔵書数を誇っていたことがわかっています。現在、藩校の蔵書は「鹿山文庫関係資料」（千葉県指定文化財）として、藩校の流れをくむ千葉県立佐倉高等学校が所蔵しています。



佐藤泰然肖像写真

そして、天保14年（1843）、江戸で活躍していた蘭方医の佐藤泰然が、佐倉に蘭医学塾兼診療所の「順天堂」（千葉県指定史跡）を開きました。佐藤泰然は、とくに外科医術に優れ、困難な手術を成功させるとともに、藩内における種痘の普及にも尽力しました。泰然の後を継いだのは、弟子で養子となった佐藤尚中^{すかなか}で、彼は泰然の次男の松本良順の勧めもあり、長崎へ留学し、オランダ軍医のポンペに学びました。尚中はその成果を佐倉に持ち帰り、多くの門人に伝えるとともに、西洋式の病院である佐倉養生所を開設するなど、その技術をもって人々を救うことに力を尽くしました。このように順天堂は、当時の最先端の医学教育とその実践が行われ、多くの優秀な人材を輩出したことから、近代日本医学の発祥地のひとつに数えられています。

(6) 近現代(明治時代～)の佐倉

① 概略

明治維新を迎えた日本は、西欧の革新的技術の導入によって、軍事をはじめとする産業を奨励するとともに、富国強兵に努めました。佐倉では、廃藩置県により佐倉藩が廃され、佐倉城の建物が取り壊され、陸軍の兵営所が設置されました。ここには、歩兵第二連隊や歩兵第五十七連隊が置かれました。以降、明治から第二次世界大戦の敗戦までの70年あまりの間、佐倉は連隊の町であり続けました。

千葉県域を徴兵区域とする「佐倉連隊」は、郷土部隊でもあり、地域の人々の生活とも結びつき、かつての城下町は連隊の町として賑わいをみせました。さらに町は、江戸型山車の引き廻しで盛り上がる祭礼などによって活気づきました。一方で、旧藩主、藩士たちにより藩政時代を見直す動きも盛んになり、かつての城下町としての記憶は、より佐倉の人々の中に浸透していったと言えるでしょう。

佐倉連隊は、西南戦争、日清・日露戦争などの主要な近代戦争に参加しました。昭和に入り、満州事変、日中戦争を経るなかで、兵営所は兵士を戦地へ送る場となり、郷土部隊としての性格が薄れていきました。大戦末期には、連隊の主力がフィリピンやグアムなどの南方諸島へ派遣されましたが、壊滅し敗戦を迎えました。

敗戦により連隊が解体された後、昭和29年(1954)に佐倉市が誕生します。市の誕生以降、志津・白井・千代田地区では開発が進み住宅地が発展しました、佐倉順天堂記念館や武家屋敷、旧堀田邸といった歴史的建造物、佐倉市民音楽ホールや佐倉市立美術館、国立歴史民俗博物館、佐倉ふるさと広場といった文化・観光施設が整備・開館し、佐倉市は歴史文化を明日に伝える都市として広く知られています。

② 連隊と佐倉



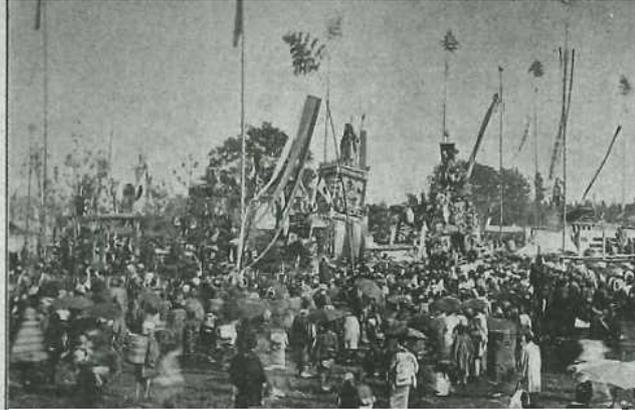
佐倉連隊兵営所の航空写真

明治4年(1871)の廃藩置県後、江戸時代の武家による統治のシンボルでもあった城郭は、兵部省が管轄することになり、翌年に陸軍省が設置されるとその所管となりました。陸軍省は、軍事拠点として利用する意図から引き続き残して管轄下に置くものと、不要とするものの検討を行い、首都東京の東を守る佐倉城は「存城」と判断されました。その後、佐倉城を新たな軍事拠点とするために城の建物の解体が進められ、新たに洋式の兵舎が現在の国立歴史民俗博物館がある椎木曲輪を中心に建てられました。江戸時代を象徴する城郭は、「近代化」を

象徴する軍隊の兵営所に塗り替えられることとなったのです。

明治7年(1874)、最初に佐倉に入営したのは歩兵第二連隊でした。、現在の新町通りから田町にかけての成田街道筋には、飲食店や日用雑貨を扱う商店をはじめ、写真店、洋服店、時計屋、パン屋、記念品店などの連隊向けの商店が立ち並ぶようになり、城下町時代にはなかった洋風生活を支えることになりました。入営者は地元で盛大に見送られ、家族らに付き添われ佐倉に前泊し、翌日に兵営所の門をくぐり厳しい軍隊生活を送ることとなりました。

そして、明治初めに、佐倉の町の人々は、東京日本橋方面より江戸時代後半に製作された江戸型山車を買入れ、秋の祭礼で引き廻しを行いました。加えて、佐倉の大工によって御神酒所（踊り屋台）の製作も進み、山車とともに引き廻す町が増えていきました。新町の商人たちが連隊向けの商売を行ったこと、つまり連隊が間接的なパトロンとなったことで、こうした華やかな祭礼が実現・継続されたと考えられます。



明治 28 年歩兵第二連隊招魂祭 山車写真

そして当時のにぎわいは、明治中頃の商家住宅である「旧平井家住宅」や「旧今井家住宅」（ともに国登録有形文化財）、大正 7 年（1918）に建てられた「旧川崎銀行佐倉支店」（千葉県指定文化財）などからもうかがうことができます。また、毎年 12 月には軍旗祭・招魂祭が行われ、兵士たちと地元の人々との間に交流がもたれ、連隊が地域と結びつくきっかけにもなりました。

歩兵第二連隊は、明治 10 年（1877）の西南戦争、明治 27 年（1894）の日清戦争、明治 37 年（1904）

の日露戦争といった近代日本の主要な戦争に参加しました。日露戦争中、陸軍が部隊を増設する中で編成されたのが、歩兵第五十七連隊でした。この連隊は、明治 42 年（1909）に水戸に移転した第 2 連隊に換わって佐倉に入営しました。千葉県全域から徴兵されたため、郷土部隊としての性格が強い連隊として知られ、連隊と地域との一体感も増していきました。

③ 城下町の歴史を紡ぐ

廃藩置県により佐倉を離れ東京に移住していた堀田正倫は、明治 20 年（1887）に華族の地方移住が認められると、産業と教育の振興のため佐倉に戻ることを決意し、邸宅の建設に着手します。そして、明治 23 年（1890）に竣工したのが「旧堀田邸」（国重要文化財・国指定名勝）です。さらに、正倫は明治 30 年（1897）に産業の育成のため堀田家農事試験場を開設しました。加えて、教育振興のため、藩校・成徳書院の流れをくむ佐倉中学校（現・県立佐倉高等学校）をはじめ、小学校にも多くの寄付・支援を行いました。佐倉中学校の新校舎（現・佐倉高等学校記念館）は正倫の寄付により明治 43 年（1910）に建築されました。

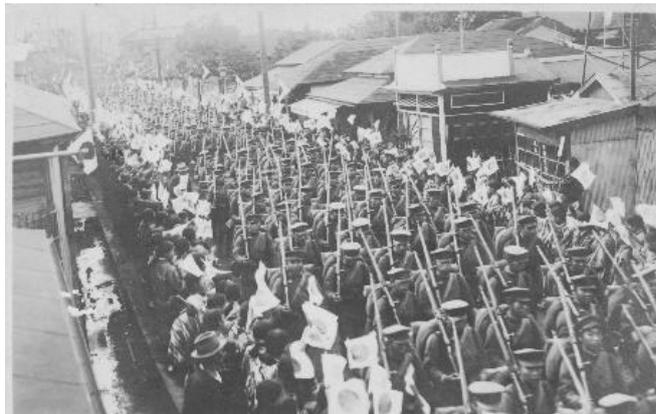
新たな時代を迎えた明治時代の佐倉では、旧藩士たちにより、佐倉藩史の編纂事業が進められ、堀田正睦をはじめとする堀田家の歴代当主の人物像と事績がまとめられました。また、堀田家の菩提寺である甚大寺の「堀田家墓所」（千葉県指定史跡）に、正睦を偲ぶ追遠碑の建立が佐倉在住の旧藩士たちによって進められ、明治 19 年（1886）に完成しました。正睦は「開国第一の功労者」とされ、最後の藩主を務めた正倫は明治時代にあっても佐倉の地域の象徴的存在として親しまれました。佐倉藩主といえば「堀田家」という現在の佐倉に関わる歴史認識は、堀田家が長く藩主を務めたことに加えて、こうした活動が現在へとつながってきた結果であるとも言えるでしょう。



堀田正倫肖像写真

④ 戦争の激化と佐倉連隊

昭和11年(1936)の満州事変、翌年の日中戦争の全面化により、歩兵第五十七連隊をとりまく環境は大きく変化しました。連隊は満州に移駐し、佐倉の兵営は入営まもない兵士を戦地にする場となり、以前の郷土部隊としての性格は徐々に薄れていきました。さらに、遠い異郷の地で命を失う人も多くなり、入営者を迎え除隊者を送り出した町は、戦死者の遺骨を迎えるようになってしまいました。連隊の町としてのにぎわいは、このころまでであったともいわれています。



出征する兵士とそれを見送る人々

さらに、太平洋戦争の戦況が悪化するなかで、昭和19年(1944)、連隊から第3大隊がマリアナ諸島グアムに派遣されました。マリアナ諸島は、アメリカによる日本本土空襲が可能になる重要地点であり、日本はこれを死守する必要があったためです。しかし、圧倒的な戦力差を埋めることはできずに部隊は全滅し、日本はマリアナを失い、アメリカは本土空襲を開始したのです。

グアムでの激戦の最中、満州に残っていた連隊にも南方への転出命令が下りました。レイテ島での決戦が決定されると、連隊は島に上陸し交戦を開始しました。連隊は善戦したものの、補給や援護のないまま多くの命が失われました。わずかな生存者は、昭和20年(1945)初めにレイテ島を脱出し対岸のセブ島へ撤退、ここで終戦を迎えました。

⑤ 佐倉市の誕生と発展



佐倉市庁舎

佐倉市が誕生したのは、昭和29年(1954)3月31日で、前年の町村合併促進法を受けて佐倉町、白井町、志津村、根郷村、弥富村、和田村が合併し市制を施行しました。昭和30年(1955)には、旭村(現四街道市)から馬渡を編入、昭和32年(1957)には、四街道町(現四街道市)から畔田、生谷、吉見、飯重、羽鳥を編入し、私たちの知る佐倉市がほぼ出来上がりました。市庁舎は町役場と同じ旧川崎銀行佐倉支店が用いられましたが、昭和46年(1971)に建築家の黒川紀章氏の設計により現在の市庁舎が建てられました。

市の誕生以降、京成電鉄沿線の志津、白井、千代田地区などでは開発が進み、住宅地が発展し市の人口を大きく増加しました。志津では70年代にユーカーが丘のニュータウンの開発が進み、都心への交通の便の良さからベッドタウンとして機能しています。白井では、70年代後半より区画整備事業が行われ、京成白井駅が現在の位置に移転しました。昭和59年(1984)には佐倉市民音楽ホールが開館し、平成元年(1989)には第1

回佐倉チューリップ祭が開催され、平成6年（1994）には市制40周年を記念して広場にオランダ風車「リーフデ」が完成しました。千代田地区は旧四街道町から編入した地域で、90年代より染井野の造成が進み住宅地の開発が進みました。根郷地区では、昭和47年（1972）の佐倉インターチェンジの開通に伴い、工業団地が多く造られました。製造業を主に、佐倉の産業の中核を担っています。弥富・和田地区は、農業が盛んな地域として知られるとともに、平成2年（1990）に川村記念美術館（現・DIC川村記念美術館）が開館するなど、その自然や風土が活かされています。

⑥ 佐倉の歴史文化を伝える

第二次世界大戦の敗戦により、明治以来の連隊の歴史に終止符が打たれることになりました。残った連隊の建物は、佐倉中学校の校舎などに転用されましたが、老朽化が進むと順次取り壊されていきました。さらに、1970年代初めに国立歴史民俗博物館の建設が決定されると、最後に残っていた兵舎が解体され、連隊の色彩は薄れていきました。その後、昭和58年（1983）に国立歴史民俗博物館が開館しています。そして、かつて佐倉城があった場所は、国立歴史民俗博物館や中学校、高校が所在するほ



国立歴史民俗博物館

か、地形を活かした城全体の遺構を良好な状態で残すかたちで佐倉城址公園として整備されています。この点が評価され、平成18年（2006）には「日本100名城」に選定されるなど、現在の佐倉のシンボルの一つに数えることができます。

そして、昭和の終わり頃から平成の前半にかけて、現在公開されている歴史的建造物や文化施設の整備・公開が進みました。現存する佐倉順天堂の建物の一部は1985年（昭和60）に佐倉順天堂記念館として一般公開されました。また、かつての武家地は、昭和の終わりころからその存在が改めて認知され、武家屋敷の保存整備が進められました。平成2年（1990）に旧河原家住宅（千葉県指定文化財）、平成4年（1992）に旧但馬家住宅、平成9年（1997）に旧武居家住宅（国登録有形文化財）がそれぞれ整備を終え開館しています。旧川崎銀行佐倉支店をエントランスホールとする佐倉市立美術館は平成6年（1994）に開館しました。佐倉市と酒々井町にまたがる本佐倉城跡は、平成10年（1998）に国指定史跡となり、旧堀田邸は、平成11年（1999）に保存整備工事が完了し、一般公開されています。

その後、国の文化財指定が進み、井野長割遺跡は平成17年（2005）に国指定史跡、旧堀田邸の建物は旧堀田家住宅として平成18年（2006）に国の重要文化財、庭園は旧堀田正倫庭園として平成27年（2015）に国指定名勝となっています。こうした文化財の整備や指定が行われるなかで、ボランティア団体やNPO団体による市の文化財、文化・観光案内の活動も進みました。

また、連隊が佐倉から姿を消して以降、秋の祭礼の実施、山車や御神酒所の引き廻しにあたっては町



現在の佐倉の秋祭り

への負担が増し、これまで通りに実施することが難しくなりました。それでも、佐倉の人々は祭礼を実施する努力を続け、平成5年(1993)に佐倉の秋祭り実行委員会が発足して以降は、「佐倉の秋祭り」として祭礼が実施されるようになりました。そして、平成の後半より佐倉の祭礼用具の価値を改めて見直す動きが高まり、山車や山車人形の修復が町の人々や保存会の手によって進められました。現在では麻賀多神社のほか、愛宕神社、八幡神社、神明神社の4社合同の祭りとして各神社の氏子である約20の地域が江戸型山車や御神酒所

などを準備し参加する形態として盛り上がりを見せています。

そして、城下町としての歴史文化が高く評価され、平成28年(2016)には、成田市、香取市、銚子市とともに「北総四都市江戸紀行」として日本遺産に認定されました。このように、現在の佐倉市は豊富な歴史文化を明日に伝える都市として発展してきたといえます。